

6・7世紀における相模地域の動態 —三ノ宮古墳群を手掛かりとして—

柏木 善治

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本歴史研究専攻

相模の6世紀後半～7世紀代に展開する古墳・横穴墓をみていくことから、地域内の状況を整理し、地域の担った役割について理解の一端を提示した。

相模の三ノ宮地域には、登尾山古墳や埴免古墳など豊富な副葬品を持つ古墳が知られており、その豊富さと横穴式石室の様相や墳丘の規模などを鑑みて、いわゆる相武国造の奥津城とも考えられてきた地域である。この古墳や横穴墓の集中する地について、三ノ宮古墳群と呼称し、その地理的な広がりについては延喜式内社である三ノ宮比々多神社を中心におよそ直径2.5km四方の範囲として提示した。また、登尾山古墳の現地表面観察などから、前方後円墳としての存在も推察した。

相模の地では近年の調査成果により、当該時期の前方後円墳が多く認められることとなった。それらの抽出とともに、三ノ宮古墳群が展開する相武国造域と隣接する師長国造域について、古墳の立地や群内の構成などを比較した。そこからは一つの古墳群を中心として主要墓域が限られるものと、河川流域に応じて立地を違っていくものの二つのパターンなどが確認された。

副葬品の優劣について、高塚墳と横穴墓が同じ古墳群内に展開する場合は、高塚墳の首長墓から出土する副葬品の優位は顕著で、やや時期が遅れると横穴墓の被葬者がそれら副葬品を採用していく状況をみた。また、横穴墓のみが卓越する地域では、副葬品としての優品採用は高塚墳による首長墓と同時期に行なわれたとし、その役割としては朝鮮半島情勢などを受けた国家の運営にかかる兵站等戦闘物資及び生活物資輸送拠点における中継基地としての、中継中核地域という位置付けをした。

前方後円墳が古墳時代中期の築造中断期間を経て、6世紀後半～7世紀初頭に期間を限定しつつ再度盛行と終焉を迎えることをみて、それは一世代が一基を築造するという様相を示すとした。この現象は地域主導の内在的な要因によるものではなく、外在的な要因に基づくとした。その要因としては、朝鮮半島情勢などのアジア的規模の政変の煽りを受けた事象として捉え、中央としては大和政権の一員であることの確認行為、地方としては前方後円墳という墳形表示により大和政権の後ろ盾という権威表示による地方運営という、両者にとっての国家運営・地方運営の思惑が一致した結果として捉えた。

キーワード：相模、三ノ宮古墳群、前方後円墳、中継中核地域、地域首長、朝鮮半島情勢

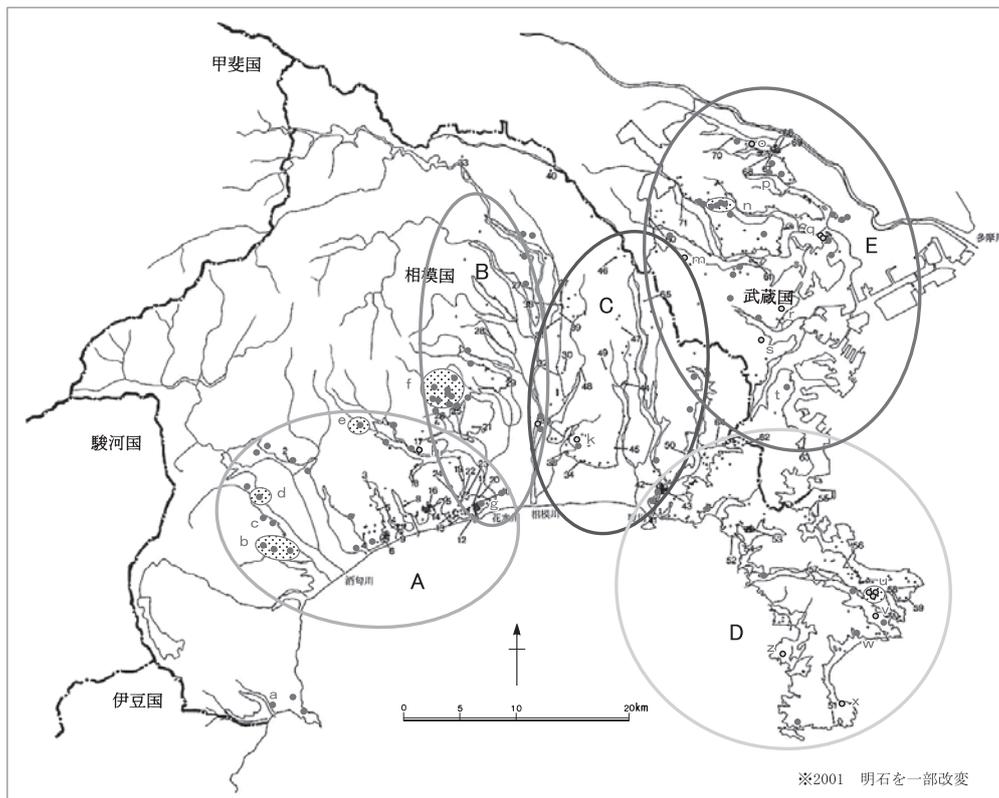
- 1. はじめに
- 2. 相模の三ノ宮に展開する古墳群
 - 2.1 三ノ宮古墳群としての認識
 - 2.2 三ノ宮古墳群の内容
 - 2.3 登尾山古墳の墳形について
- 3. 相模地域の様相
 - 3.1 相模の前方後円墳と古墳群
 - 3.2 副葬品の優劣
 - 3.3 中継中核地域
- 4. 前方後円墳築造の外在的要因
 - 4.1 三ノ宮古墳群の政治性
 - 4.2 相模に展開する古墳群と東アジア情勢
- 5. まとめ

1. はじめに

相模国は神奈川県のうち、凡そ横浜・川崎市域を除いた範囲として捉えられるが、この地域内にも後期古墳が集中する地がいくつか知られ、久野古墳群(小田原市)や桜土手古墳群(秦野市)、広畑古墳群(秦野市：薬師原古墳群)¹⁾、谷原古墳

群(相模原市)、大津古墳群(横須賀市)などが著名な古墳群としてあげられる(図1)。

それら以外にも、現在の伊勢原市の三ノ宮地域は古墳が集中する地として知られ、登尾山古墳や埴免古墳などでは出土遺物に銅鏡や金銅装馬具、裝飾付大刀を持つなど、これらは往時の



- a 八雲里古墳 b 久野諏訪の原古墳群 c 黄金塚古墳 d 塚田古墳群 e 桜土手古墳群 f 三ノ宮古墳群 g 釜口古墳 h 二子塚古墳(秦野)
 i 宮山中里遺跡 k 十二天古墳群 m 三保杉沢古墳 n 赤田古墳群 o 二子塚古墳(川崎) p 馬絹古墳 q 駒岡堂の前・瓢箪山
 r 軽井沢古墳 s 瀬戸ヶ谷古墳 t 室の木古墳 u 大塚古墳群 v 蓼原古墳群 w かるうと山古墳 x 雨崎古墳群 z 長井経塚古墳
- 2 唐沢横穴墓群 7 諏訪脇横穴墓群 13 愛宕山下横穴墓群 17 岩井戸横穴墓群 21 城山横穴墓群 22 万田八重窪横穴墓群
 23 万田熊之台横穴墓群 25 三ノ宮・下尾崎横穴墓群 26 三ノ宮・上栗原横穴墓群 31 上今泉横穴墓群 46 浅間神社西側横穴墓群
 54 新宿横穴墓群 56 高山横穴墓群 59 烏ヶ崎横穴墓群 60 熊ヶ谷横穴墓群 66 久地西前田横穴墓群 71 早野横穴墓群

図1 三ノ宮古墳群位置図

有力者の証と考えられている。他の地域に点在する古墳群と比較したときに、副葬品等の優越性などを受けて、三ノ宮の地に展開する古墳は「相武国造」の奥津城とも理解されてきた。

三ノ宮の地は明治期から発掘調査事例が知られる云わば先駆的な地でありながらも、古墳の内容については、その一部が断片的に知られているのみであり、これまで地域内に展開する古墳・横穴墓の総体としての検討はなされてこなかった。群としての位置付けや、古墳の個別的な検討もまだ十分とは言えるものではない。

いわゆる律令期に相模へと地域が変貌するにつけ²⁾、三ノ宮の地はどのような影響力を地域に与えまた享受してきたのか。それらをふまえ、個別地域としてのモデルパターンをどのように提示できるのか。

これを理解するための助けとなるのが、相模地域に展開する古墳・横穴墓の様相を改めて見直すことであろう。前方後円墳の築造終焉や、それに関する社会的な背景と地方のあり方、前

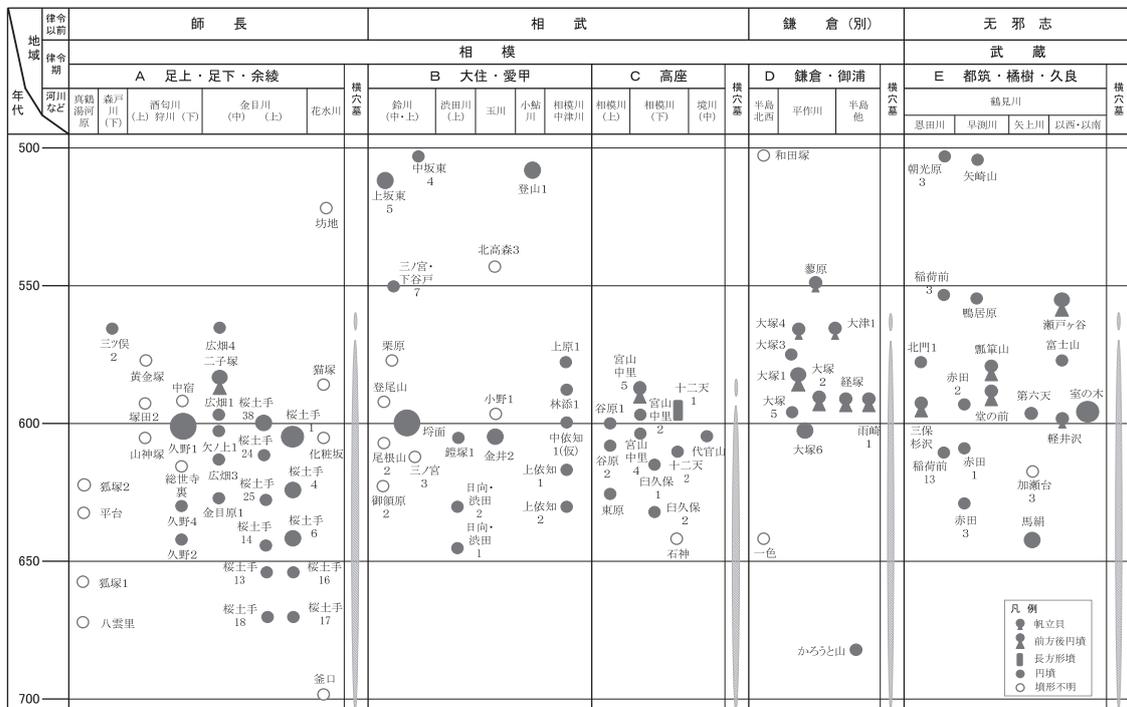
方後円墳とその他の古墳から出土する副葬品、古墳と横穴墓に見られる共通的な事象などについて検討を加えて、地域社会のあり方を探りたい。

2. 相模の三ノ宮に展開する古墳群

2.1 三ノ宮古墳群としての認識

古墳群の集中する三ノ宮は、伊勢原市の北西に位置する。三ノ宮古墳群という名称は、慣例的に一部で用いられてきたが、改めて近年になり古墳群の意義や位置づけが示された〔西川2007〕。

三ノ宮地区の古墳は、延喜式内社である三ノ宮比々多神社の周辺を中心として、大山南麓に展開しながら集中域を形成する。およそ鈴川～善波川に挟まれる範囲として捉えられ、中央には栗原川が貫流する。この三ノ宮比々多神社を中心とした集中域の隣接地域についてみていくと、南西方向には金目川流域の前方後円墳で銀装圭頭大刀³⁾を出土している二子塚古墳や、それを取り巻く広畑古墳群などがある。北東には



※2005柏木を一部改訂

図2 相模・南武蔵の後期主要古墳・横穴墓編年表

渋田川流域の円墳で装飾大刀を出土している日向・渋田古墳や（現）玉川流域の北高森古墳群などがそれぞれ個別に纏まりを持つが、地形的隔絶性もあり三ノ宮の集中域とは一線を画すと言えよう。

三ノ宮比々多神社を中心とした古墳集中域は、石野瑛氏の研究成果が1995（平成7）年に改めて立花実氏により提示され、当時の集計では70基以上を数えている。戦後の農地拡大の際、多くの古墳が破壊されたという伝承もあるが、人力での破壊のため、石室の基底部分はまだ残存している可能性も指摘されている。実際、2009（平成21）年に発掘が行われた三ノ宮・上原田遺跡⁴⁾では横穴式石室の調査が行われている。

古墳の集中域として理解される三ノ宮であるが、古墳に混在して横穴墓群も複数認められている。三ノ宮・下尾崎遺跡、三ノ宮・上栗原遺跡からは副葬品としての馬具や装飾大刀⁵⁾の出土も知られ、相模国内をみても優れた遺物を複数所有する横穴墓として理解されている。この高塚古墳と横穴墓の集中する、三ノ宮比々多神社を中心とした部分を古墳群の領域として捉えることができ、この領域に示される古墳の纏まりとなる2.5km四方を三ノ宮古墳群という範囲としたい。

西川氏の三ノ宮古墳群の位置づけとしては「前方後円墳を採用しない」「副葬品は豊富であり、ヤマト政権との密接な関係は保持している」「前方後円墳が「乱立」する関東地方の社会構造とは、異なったシステムが機能していたと理解できる」とされている。位置づけ等に関しては後にふれることとしたいが、近年の低地遺跡における調査の増加などからも、相模地域内で前方後円墳の調査例は増加しており、少しく様相を考え直す必要性も見えてきたところである。

2.2 三ノ宮古墳群の内容

三ノ宮の地は古く明治時代より発掘調査が行われてきた地域として捉えられるが、その頃の

三ノ宮地域に関する理解の側面は、「積石塚」が多い地域とされていた。

積石塚については、吉田章一郎氏により整理されている。吉田氏によると、坪井正五郎氏が積石塚を発見した場所として相模國中郡比々多村（現在の伊勢原市）があげられたとされる〔坪井1900〕。

ただ、池上悟氏は「近隣における秦野市桜土手古墳の如くの、石材を多用する主体部の控え積み、あるいは列石の如き施設の誤認であった可能性が高いもの」とみなし伊勢原に積み石塚があったという過去の理解は誤認としている〔池上1980〕。

三ノ宮古墳群のなかで、現在までに群として報告されているものには、御領原古墳群・尾根山古墳群がある。今回は三ノ宮古墳群を構成する「支群」として表記したい。三ノ宮の地に展開する古墳は、およそ中央を貫流する栗原川により南西と北西の纏まりに二分される。南西側には、字名となる御領原を取り巻くように、標高の高所に登尾山古墳・埴免古墳などが築かれ、装飾大刀の出土、横穴式石室や墳丘規模等の様相などから、首長墓として理解できるものである。

三ノ宮の地には横穴墓も多数営まれており、いわゆる高塚墳と横穴墓が互いに密集して築造される様相が知られている。横穴墓のなかでも前庭部に石積みがされる横穴墓が群中に複数存在し、これは丹沢山地の前山から多摩地域にかけての特徴として捉えられる。

そのほか、埋葬施設として理解されるものには小石室がある。三ノ宮の地では小石室が群集する様相が知られるが、相模では、古墳群内に高塚古墳と共に群在するものと、小石室のみが群在するものが存在している。

ここで様相が知られている高塚古墳・横穴墓などについて、個々にみていくこととする。

①高塚古墳

三ノ宮・下谷戸遺跡H7号墳 三ノ宮3号墳の

近くで、東名拡幅時に調査されている。石室内から出土した甕が陶邑MT15型式（以下陶邑は省略する）と報告され、相模地域の初現的な横穴式石室として理解されている。石室は幅狭な無袖式で全長5.2m（玄室長4.3m）、幅1m強、奥壁は石室幅を占める一段の石が遺存する（図4）。

出土遺物は土師器坏、須恵器甕、甕、鉄鏃、刀子（鹿角装）、勾玉、管玉、丸玉、小玉があり、玄室内での遺物の出土状況は、人骨・副葬品共に上下2層に分かれて分布している。また、周溝内の土坑では馬の埋葬も行われ、頭蓋を北に向け左側を下にして横臥した状態で発見されている⁶⁾。発掘調査では7基の古墳が調査されているが、群中の三ノ宮3号墳を除いては3基の古墳で石室の存在が確認・推定されている。

登尾山古墳 小字御所が谷と宮の脇にまたがる尾根上に所在し、1960（昭和35）年3月農道工事中に石室が発見された。横穴式石室は自然石積の両袖式である。玄室の奥幅1.6m、前幅1.5m、長さは2.8mで、奥壁で側壁と同サイズからなる石材を使用した四段の石積みが確認されている。羨道は直線的に延び、長さ3.2m、幅0.8m、墓道は長さ4.5m程度で、羨道との境にはわずかな段差が形成されて前庭部側が一段下がり、入り口に向け徐々に幅を広げる（図3）。

出土遺物は銅鏡、馬具のほか、金銅装圭頭大刀などが石室内から出土し、表面採集ながら家形と見られる埴輪片も知られる。遺物の内容からは時間幅があることが窺えるが、築造はおおよそ6世紀後半であろう。墳形は円墳とされている。

埴免古墳 1968（昭和43）年の学校建設工事中に古墳・石室が一部破壊されて遺物が出土した⁷⁾、直径40mの円墳で、相模地域でこの時期最大級の円墳とみなされている。石室は大振りな自然石（一部加工）を用いた片袖式で、玄室長4.75m、奥壁幅2m、高さ最大で2.2m、羨道は長さ4.5m以上、幅0.9mである。奥壁は石室幅を占める二段の大振りな石が用いられるが、下段のものが最も大きく、最上部には小礫が充填されている。狭小な無袖の

横穴式石室が多い相模地域においては、その規模からは特別な印象をうけ、首長墓としての理解がされる（図4）。銀装円頭大刀（圭頭の可能性もあり）や馬具が出土し、巨石を使用することなどから6世紀末という時期が考えられる。

三ノ宮3号墳 御陵原支群中の円墳とされ、1964（昭和39）年に調査されている。横穴式石室は無袖式で、全長6.7m、幅1.4mである。奥壁には石室幅を占める大振りな石が一段遺存し、前庭部にも石積がみられ、入口側に広がりを持って開いている（図5）。この横穴式石室は全長において、相模地域でも最大級の規模をもつ。

出土遺物は馬具（鉄地金貼雲珠・鉄製環状鏡板付轡）、鉾、直刀、銅製責金具、攝子、刀子、鏃、ガラス丸玉、土師器坏、須恵器坏・蓋、フラスコ形長頸瓶、甕などがあるが、甕は前庭部にて破片で出土したとされる。7世紀前半の築造とみられる。

御領原支群 三ノ宮比々多神社東方の鈴川左岸、竹の内から神明にわたる約1500mの間に分布する古墳群集地とされる。戦後に開墾されてほとんどが消滅したものの、1900（明治33）年に一部が調査された⁸⁾。

三輪玉が出土しているが県内の例としては、群中の「大塚」と呼ばれた古墳からの資料が知られるのみである⁹⁾。後にもふれるが、穴沢味光・馬目順一・中山清隆氏によりこの支群の資料とされる双龍環頭大刀が紹介されている〔穴沢他1974〕。

尾根山支群 自然石積みの横穴式石室をもつ4基からなる円墳群である。1961（昭和36）年に開墾による破壊直前に調査されたが、いずれも盗掘を受けていた。

第1号墳は調査前の直径が13mで、横穴式石室は幅狭な無袖式である。全長6.4m、幅1.6m、奥壁は石室幅を占める一段の石が遺存していた。玄室は、床面での大振りな石列により奥側と手前側に仕切られていた。

第2号墳は長楕円形の塚状に残存していた。横穴式石室は幅狭な無袖式、玄室長3.8m、幅1.95m、

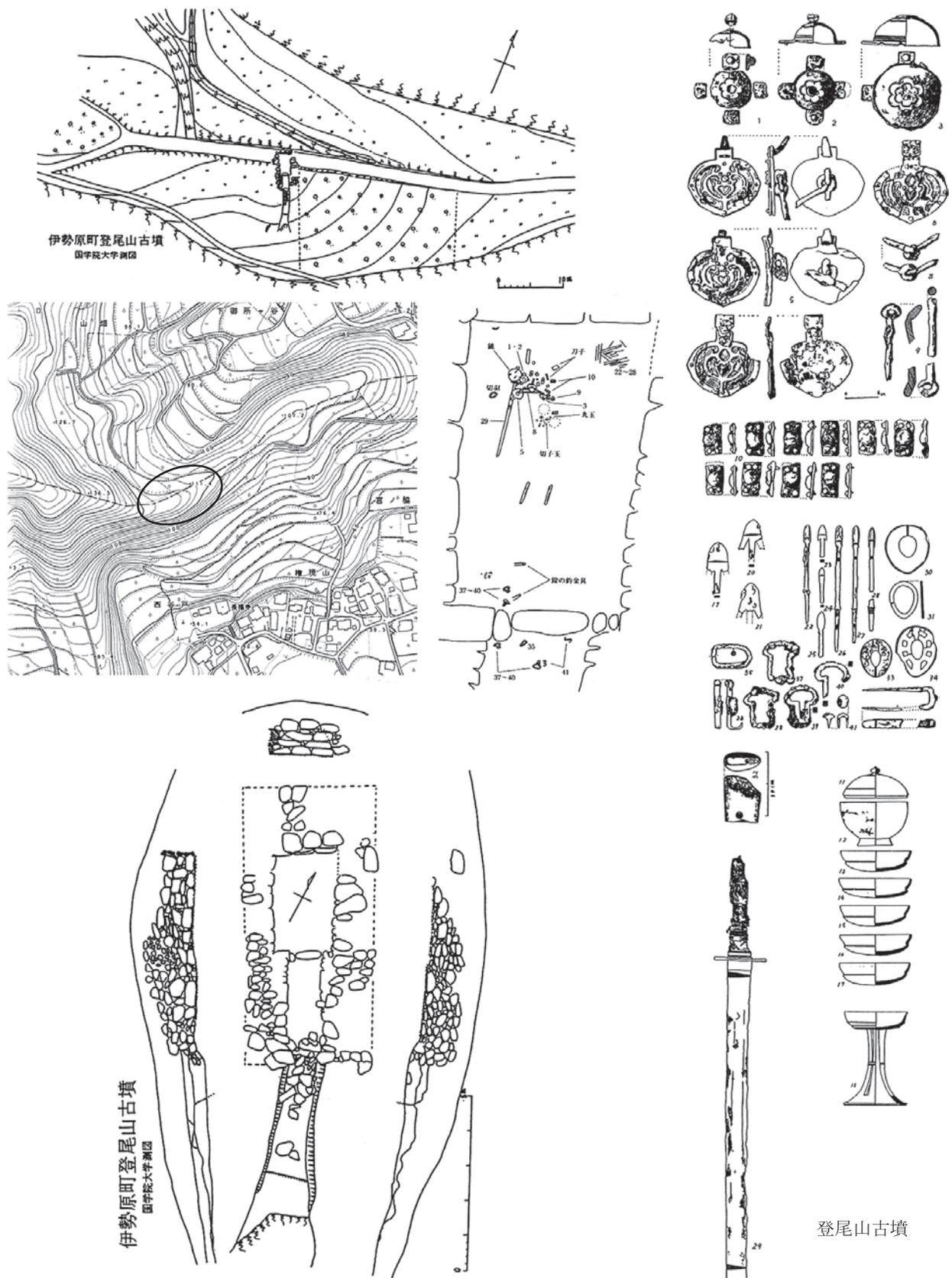
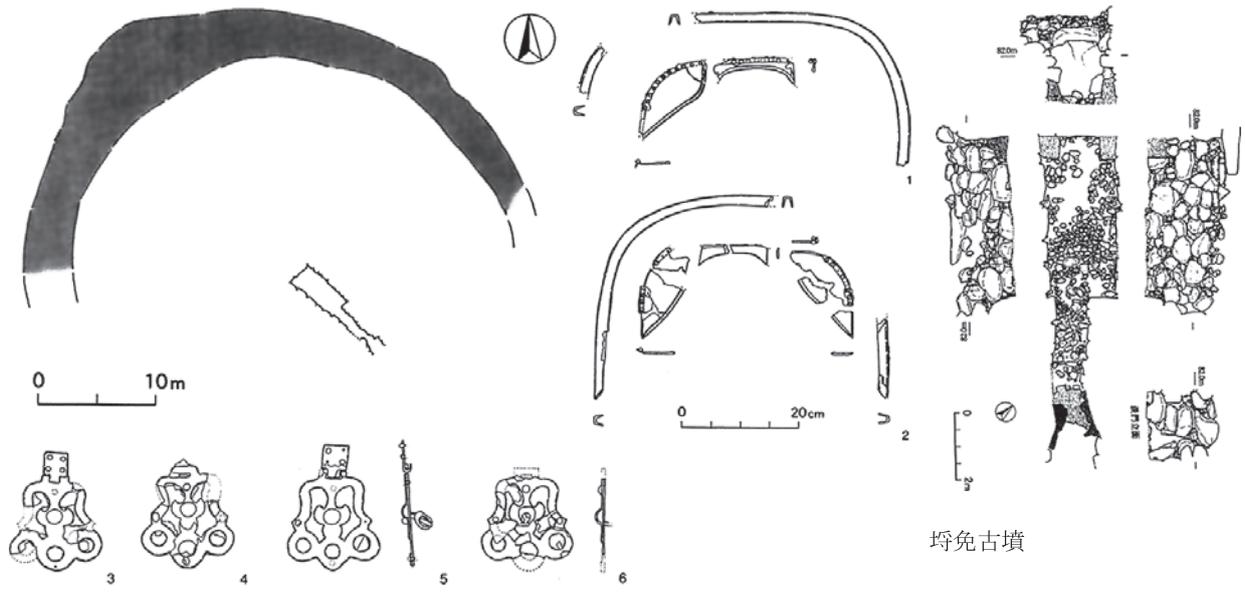
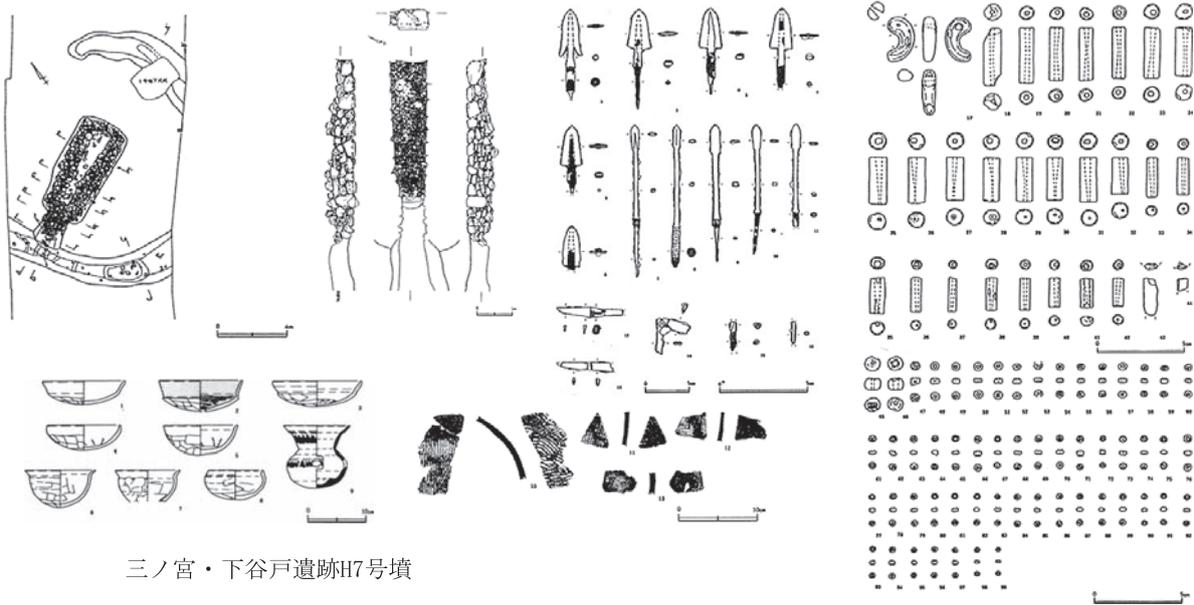


図3 三ノ宮古墳群の古墳・横穴墓（登尾山古墳）



埴免古墳



三ノ宮・下谷戸遺跡H7号墳

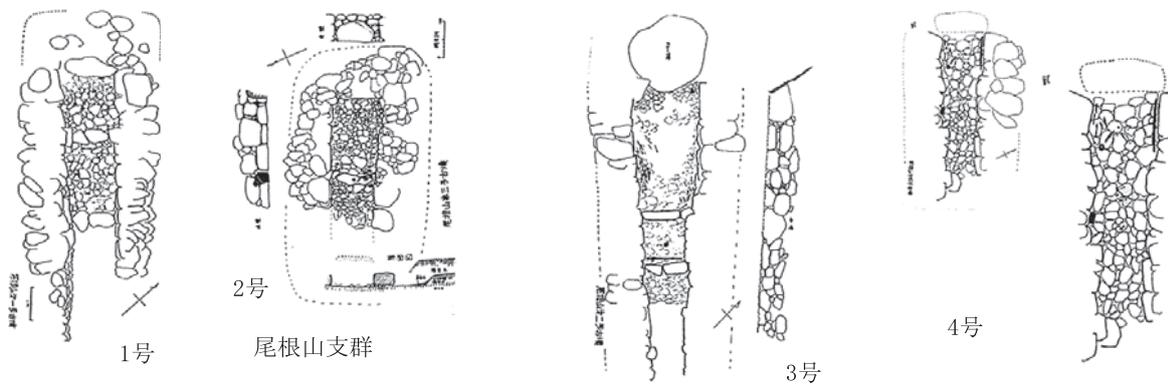
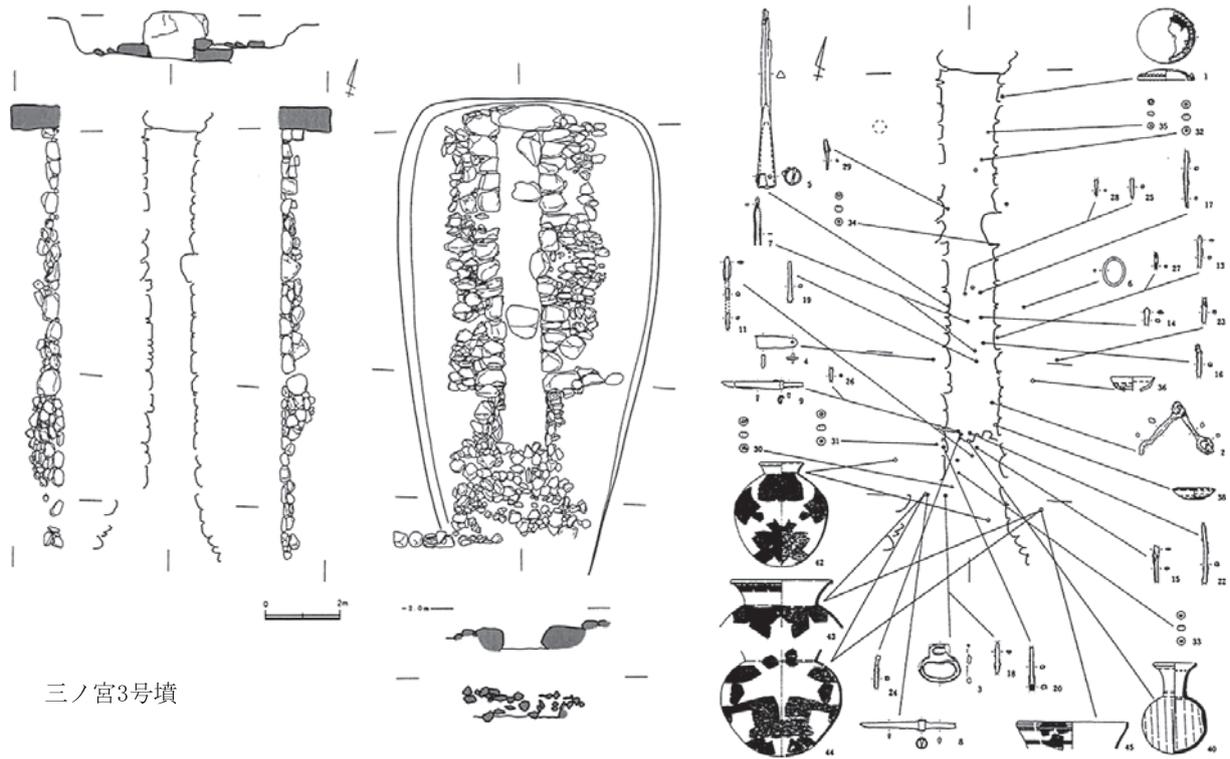
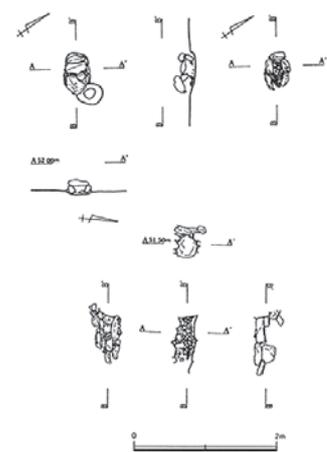
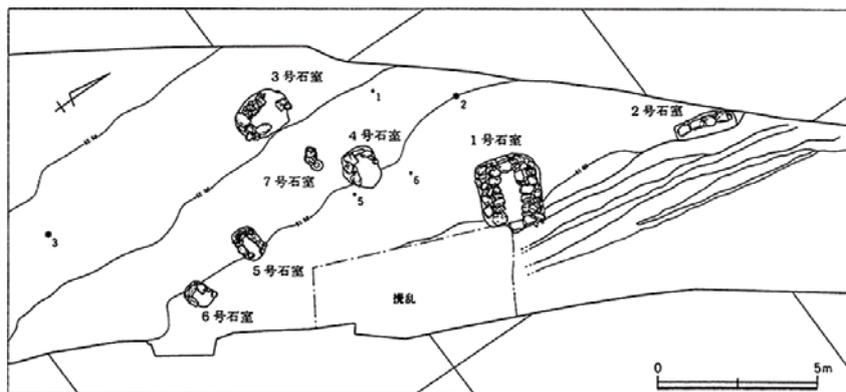


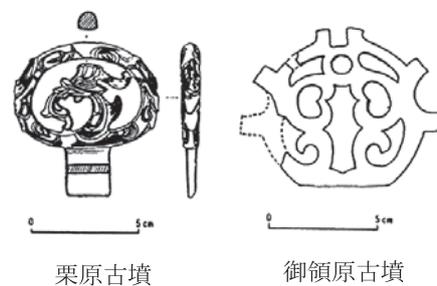
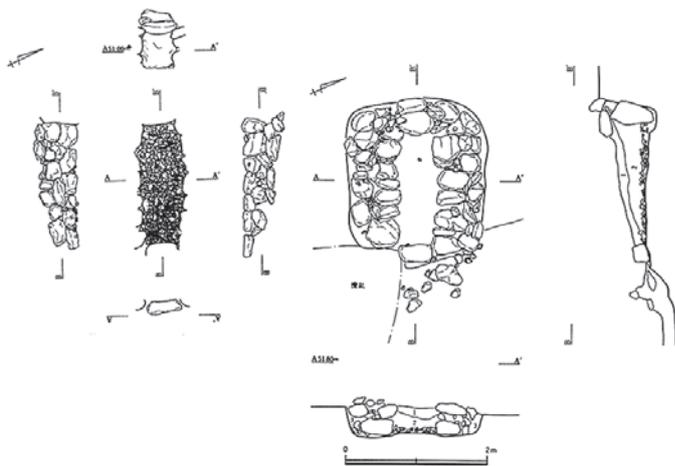
図4 三ノ宮古墳群の古墳・横穴墓（埴免古墳／三ノ宮・下谷戸遺跡 H7 号墳／尾根山支群）



三ノ宮3号墳



三ノ宮・下谷戸遺跡 小石室群



栗原古墳

御領原古墳

図5 三ノ宮古墳群の古墳・横穴墓（三ノ宮3号墳／三ノ宮・下谷戸遺跡小石室群／栗原古墳／御領原古墳）

奥壁は石室幅を占める鏡石が遺存している。羨道5.4m、幅1mとされるが、1号墳同様に玄室は仕切られていた。墳形は円墳で直径15m規模と推定されている。

第3号墳も墳丘が失われ、横穴式石室は幅狭な無袖式、入口側は半壊している。残存していた全長3.4m、幅1.15m、奥壁は石室幅を占める一段の石が遺存している。

第4号墳も墳丘が失われ、横穴式石室は玄室南西壁より羨道の壁が20cm程度迫り出しており、片袖式のようにも見えるものである。玄室長2.3m、幅0.95m、羨道長1.7m、幅0.55mで、奥壁は石室幅を占める一段の石が遺存している（図4）。

いずれも小規模な円墳であるが、出土遺物は直刀、鏝、鉄鏃、刀子、耳環、切子玉、白玉、丸玉、小玉、須恵器提瓶などの出土が知られている。

②横穴墓

三ノ宮・下尾崎遺跡／三ノ宮・上栗原遺跡

三ノ宮では栗原川流域に横穴墓の多くが所在し、尾根筋には古墳が、崖面には横穴墓が築造されるという状況である。下尾崎は南に延びる丘陵西斜面に位置し、築造された横穴墓の入口付近の標高からは、崖面に3段程度の築造がされる。下段北寄りと中央、上段北寄りで比較的遺存が良好で、小単位の支群を形成する。上栗原でも崖面に3段の築造がみられ、中央の一群とその両側に展開する小支群を形成する。そのなかの上栗原4・5号墓では前庭部を共有し、そこには石積みがされる（図6・7）。

下尾崎4・5号墓で平瓶（7世紀前半）が、下尾崎19号墓で土師器坏（7世紀後半）や刀子があり、下栗原6号墓では長頸瓶（7世紀後半）、下尾崎23号墓では甕（7世紀後半～末）が、下尾崎1号墓では八窓鏝や全国的にも類例の少ない輪鏡（7世紀中葉以降）、上栗原5号墓では壺鏡（7世紀後半）が出土している。

これら横穴墓は、家形やドーム形を呈す横穴

墓がなく、前庭部に石積みを施すものが多く、玄室内などには敷石が多用される。また、前庭部の長大なものが散見され、造り付け石棺や高棺座はなく、奥壁に並行した低位な棺座が主体となる。

③主要出土遺物

環頭大刀の出土が栗原古墳、御領原古墳で知られている。前者は単龍環頭大刀、後者は双龍環頭大刀である（図5）。

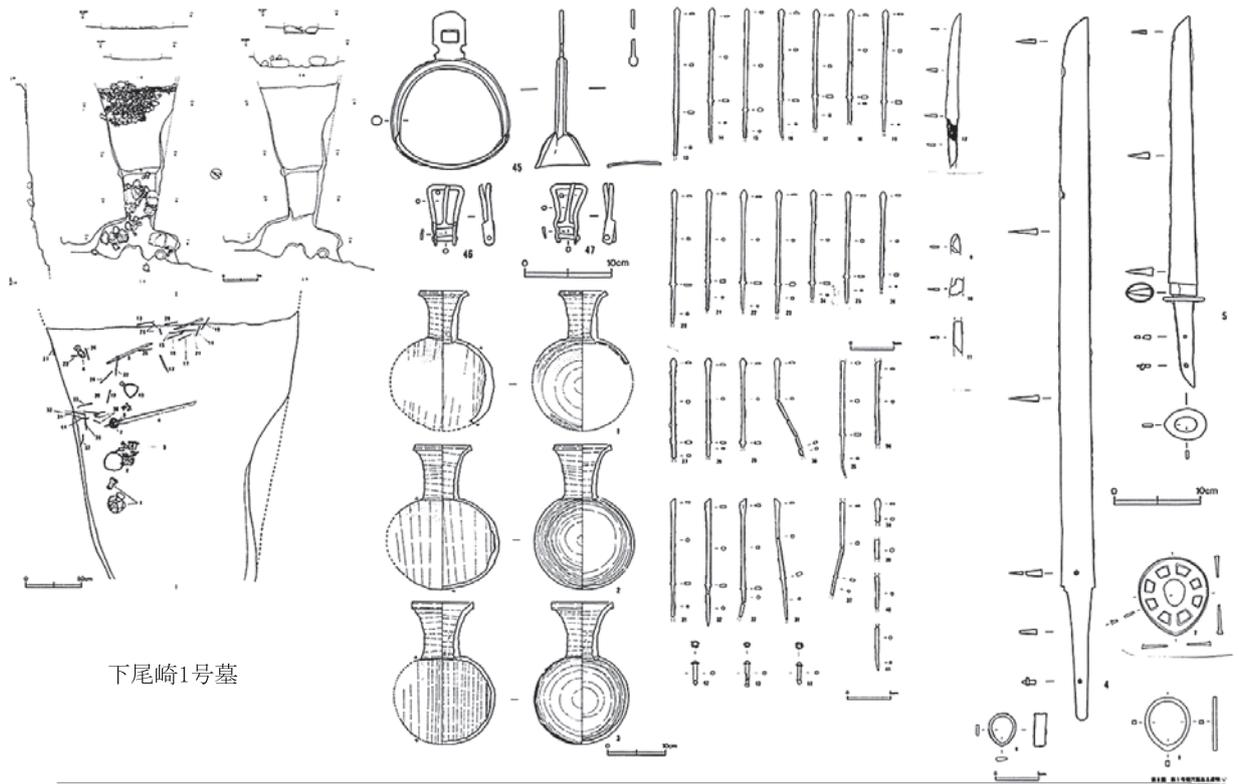
④小石室

三ノ宮・下谷戸遺跡では、群在するいわゆる小石室も7基調査され、集中域の一つとなる。県内には他にも相模原市谷原古墳群や秦野市桜土手古墳群で小石室の存在が知られ、相模川中流域左岸の海老名市河原口坊中遺跡における近年の調査成果も注目される。

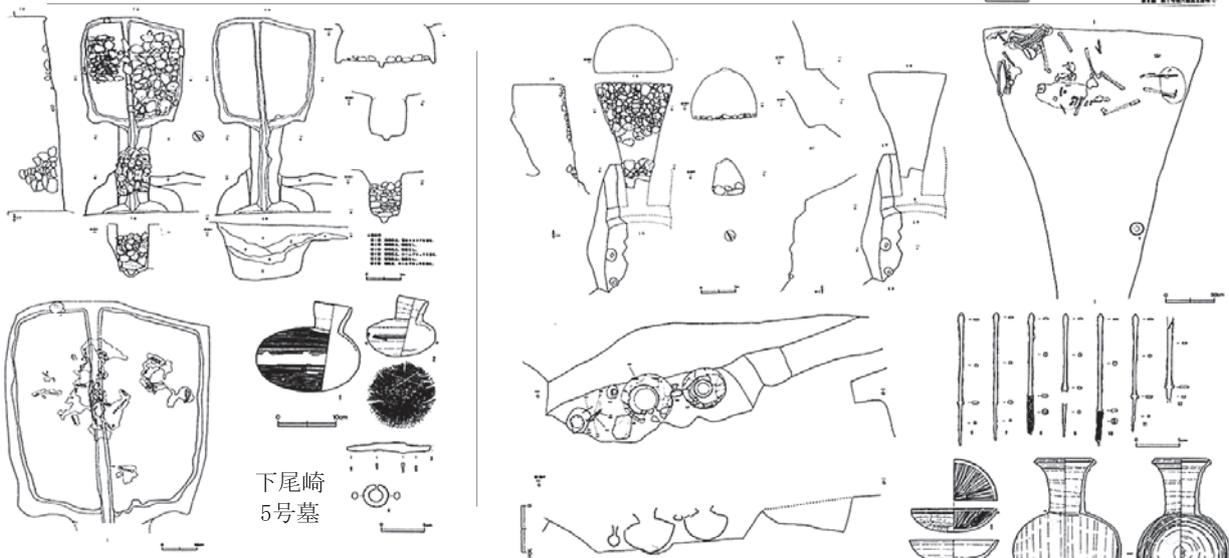
高塚古墳群と混在する桜土手古墳群とは様相を違え、三ノ宮・下谷戸遺跡では小石室のみが群在する。大きくは長さ1.75m、小さくは0.4mと様々なサイズが混在するが、比較的大振りなものは横穴式石室とほぼ同じ構造である。伸展葬としての埋葬は困難なサイズのものであり、三ノ宮・下谷戸遺跡の石室内から生身の人歯が出土していることなど、埋葬の方法としては改葬という所作も読み取れるものである（図5）。

これら小石室は、石室のように石が組まれて、礫床を伴う小石室と、壁石は積み上げられず方形に配される石組み施設とに分けられる。使用に際しては、そのサイズから竪穴系埋葬施設と同様の機能が考えられ、桜土手18号墳小石室では、礫床が2面構築されているようで追葬も考慮されている。

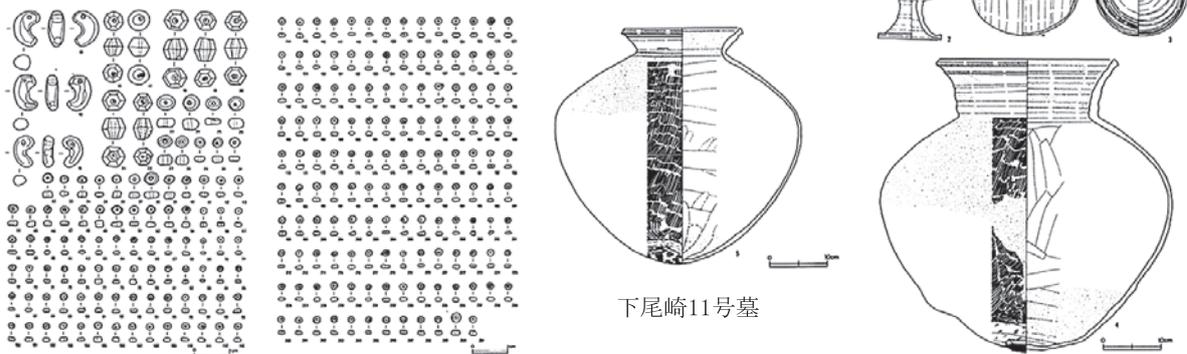
石室状の「小石室」と礫を配する「石組み施設」は、改葬に供する埋葬用の施設として同義的な事物として理解できるものである。三ノ宮・下尾崎5号墓のなかにも石組み施設が存在しており、古墳・横穴墓の墓制に対して埋葬という事象におけるひとつの結節点として評価できる。



下尾崎1号墓



下尾崎
5号墓



下尾崎11号墓

図6 三ノ宮古墳群の古墳・横穴墓（三ノ宮・下尾崎遺跡）

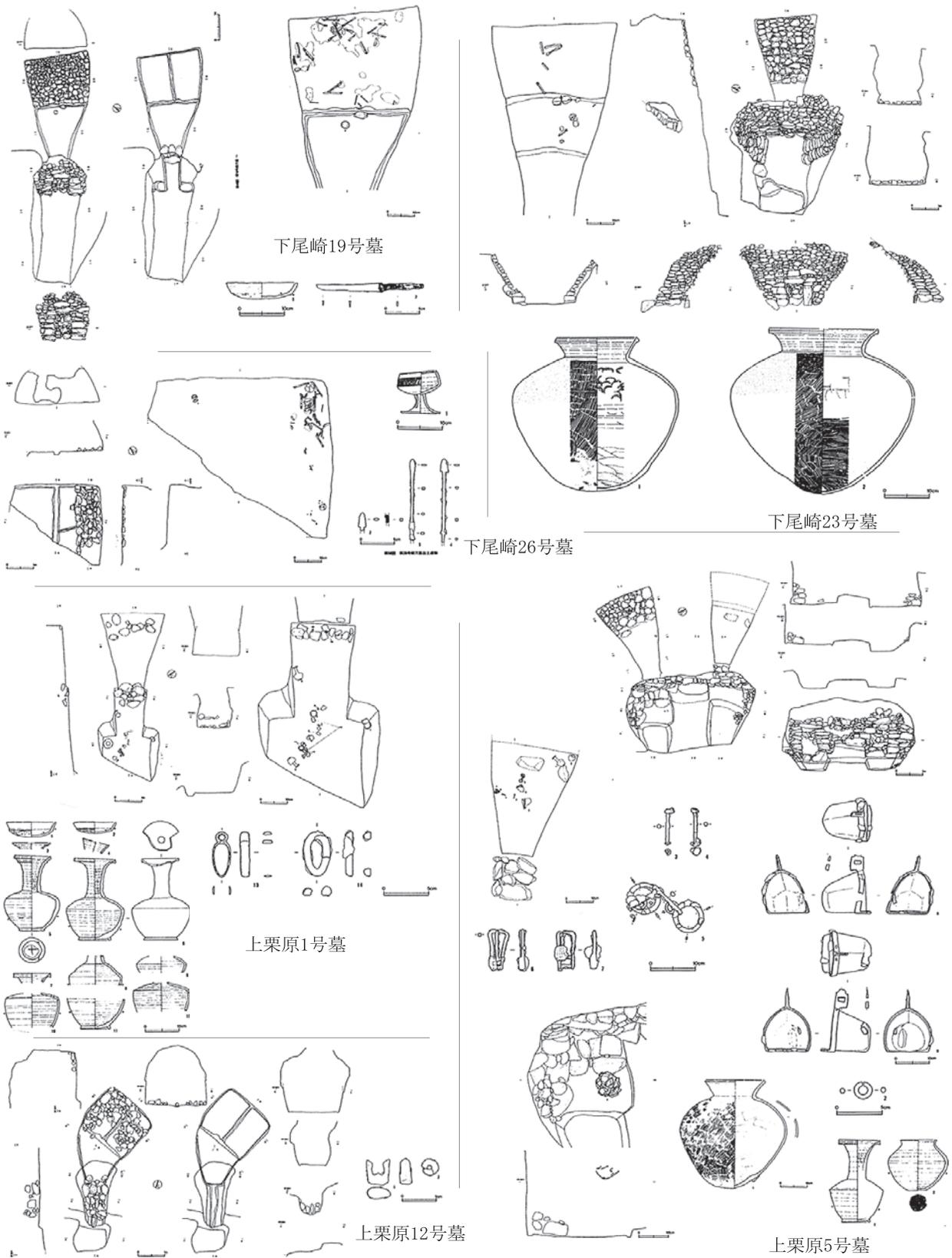


図7 三ノ宮古墳群の古墳・横穴墓（三ノ宮・下尾崎遺跡／三ノ宮・上栗原遺跡）

2.3 登尾山古墳の墳形について

三ノ宮古墳群に首長墓的な位置付けとして存在する登尾山古墳であるが、墳形は円墳と理解されてきた。現況地形について2010年に踏査したところ、前面に広がる平野側（南側）に少しながら平坦面が存在することも窺え、その広がりをもって墳形を捉えていくことが必要である。しかし地形改変も激しく、これまで明快な資料がないままに円墳としてきたきらいもあろう。周囲に展開する古墳及び古墳群の様相を踏まえて、登尾山古墳の墳形について考えてみたい。

登尾山古墳は眺望の良い大山南麓の丘陵地形の脊梁部に築造されているが、その丘陵地形の最高所ではなく、一段下った東方に迫り出した舌状地形の付け根付近に築かれている。古墳の北側は果樹畑として整備され、人為的に段切りを施した地形へと変質している。古墳は農道開発により発見されており、現在も農道を山裾から歩いてみると、その道程は横穴式石室の直前で整備が中断された印象を受け、石室付近からは獣道とも思しき狭い道へと変化し、古墳を破壊しての整備が中断された様相が想像されるものである（図3）。石室付近は短いながら急な上り坂となっており、墳丘としての高まりが僅かながらイメージでき、北側は果樹畑としての段切りなどにより大きく削平されているが、南半を中心としては、やや旧来の地形が遺存しているようにも感じられる。

横穴式石室の玄関からしばらく南へ下ると、少しく平坦な面が存在し、その平坦面は南半を中心としながらも、墳丘（円丘）部分を圍繞するようである。標高が高所となる西側は、東・南側ほど明確なテラス状の平坦面が確認できないが、石室の入口から円丘部分を過ぎても、西方向に平坦面は継続するという印象を現地観察の結果として受ける。このことから、円墳ではない墳丘形状の可能性も指摘でき、横須賀市の大津古墳群中の尾根上の狭い空間を活用して築造された1号墳（前方後円墳）と同様な印象も

持つことができる。木々が生い茂る中での観察には限界があるが、墳形確定に向けては現在の限られた情報を最大限生かす必要があり、詳細な測量調査の実施が必要といえよう。

登尾山古墳は眺望豊かな地に築かれていることから、南側下方に広がる平野部からの眺めも良好であったことが考えられる。これは平地からの視点をも意識した立地ともいえる。

登尾山古墳と同じ頃となる6世紀後半～7世紀初頭という時期に築造された古墳・古墳群の様相について相模を中心として後述し、それらにみられる古墳との対比からみえてくる墳形の可能性も後に指摘して補足したい。

3. 相模地域の様相

3.1 相模の前方後円墳と古墳群

前方後円墳と円墳からなる古墳群は、三ノ宮古墳群の近在では秦野市の二子塚古墳と広畑古墳群が代表例として挙げられる〔小出他1974〕。薬師原台地の東突端部近くに築造され、眺望という観点からは登尾山古墳と同様の立地として捉えられるものである。二子塚古墳は登尾山古墳の南南東4.5kmにある。

この古墳が所在する薬師原台地上には、後期の群集墳となる広畑古墳群が展開しており、河岸段丘の一段下段となる箇所には、下大槻欠上遺跡で調査された古墳¹⁰⁾なども存在し、段丘斜面には岩井戸横穴墓群なども築かれている〔秦野市2001〕。

これら古墳・横穴墓群は、およそ東西1kmの範囲で展開し、二子塚古墳を代表として、後期から終末期にかけて累々と古墳が築かれていた。その南方には、上吉沢市場地区遺跡群B地区市場古墳が大磯丘陵のやや奥まった箇所に築かれており、横穴式石室の残骸とおぼしき石列と共に、前方後円形に圍繞する小規模な溝が調査されている〔高杉他2000〕。

三ノ宮古墳群の東方に目を転ずれば、高森白金山古墳があり、こちらも前方後円形となる小

規模な溝に囲繞された遺構が調査されている。しかしながら前方後円形に溝が囲繞するという以外は、古墳として理解することは困難であり、その存在は不確かなものとなっている。また、三ノ宮古墳群の南東方とみられる、神明社境内古墳も時期は不詳ながら前方後円墳という理解もされている [中丸1974]。

相模川左岸の自然堤防上にある、宮山中里遺跡では前方後円墳と円墳からなる古墳群が相模川に沿って発見され、前方後円墳は墳長30mで、周溝内からは須恵器短頸壺の他、土師器坏、須恵器裝飾器台（断片）などが出土している。裝飾器台は断片的な出土ながら、相模でも唯一の出土例として知られている [渡辺他2004]。主体部は不明瞭だが、石の出土がみられないなど、竪穴系の埋葬施設とも考えられる。相模では6世紀中葉の横穴式石室の出現以降も竪穴系の埋葬

施設が多数知られており、横穴式石室を採用しないグループの系譜として把握ができる。

三浦半島では、平作川流域の大塚古墳群で前方後円墳が継続的に複数築造され、近年調査された大津古墳群のなかにも前方後円墳が知られる。また、同じく三浦半島内には、蓼原古墳を皮切りに、経塚古墳や詳細不明ながら雨崎古墳群などでも前方後円墳の存在が推測されている [稲村2004]。

相模の地域をどのような領域として考えていくかは、様々な見解が示される場所ではあるが、河川流域を一つのまとまりと見た場合には、西方では、酒匂川流域という足柄平野を中心とした地域が一つの領域として理解でき、そこでは明確な古墳群の推移が把握できる (図8)。

足柄平野を含む「師長国造」の領域について、金目川流域を範囲に含めて考えた場合は、二子

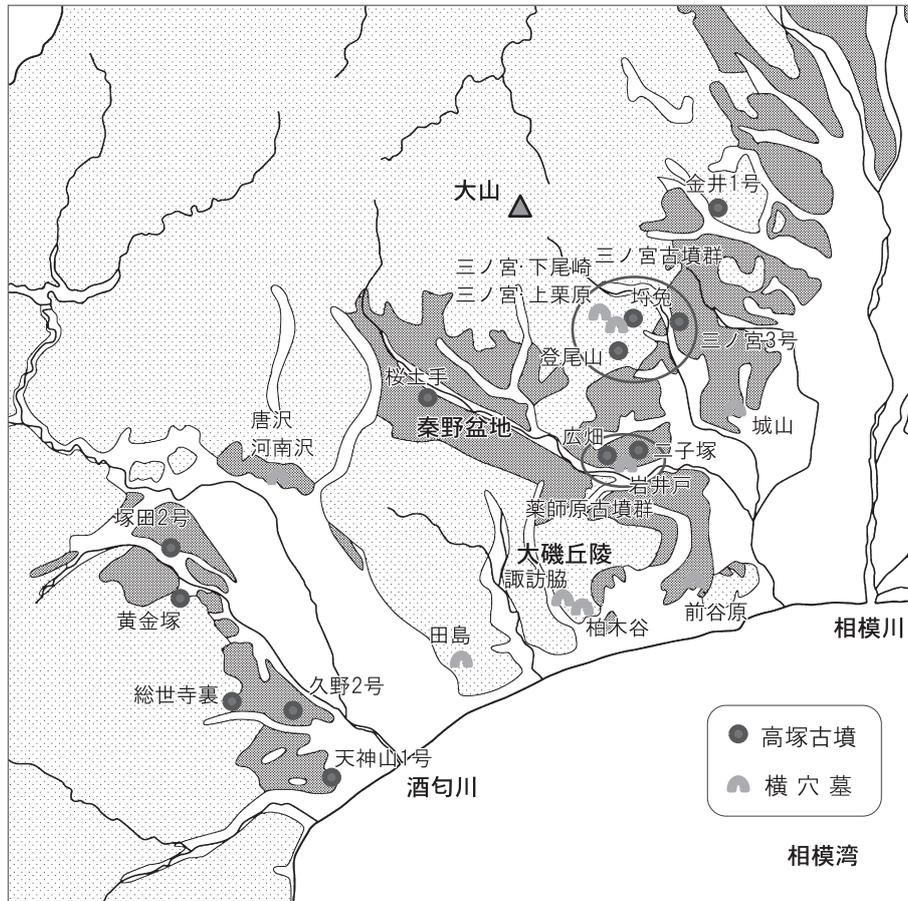


図8 相模西部の高塚古墳及び横穴墓分布図

塚古墳がその領域に含まれる。三ノ宮古墳群とは近い距離ではあるが、相対する首長としての位置付けができるものである。三ノ宮古墳群の存する「相武国造」域では、古墳群が一つの大きなまとまりとして捉えられるものであるが、「師長国造」域をみると大首長が古墳を築造する地域以外にも、数基からなる古墳群が点在している状況がわかる。金目川流域では、薬師原古墳群のように高塚墳と横穴墓が一定地域内に混在するという状況もみてとれるが、西の足柄平野を中心としては大局的にみた場合、古墳群と横穴墓群は立地を違えることとなる。国造域という二つの隣り合う領域をとりあげても、築造の様相までも統一的な事象とはならないことが窺える。

足柄平野北部には、足柄峠越えのルートを意識できる基点に塚田2号墳が存在し、南方には黄金塚古墳がある。両者は足柄平野では出土が限られる環頭柄頭を持つ。黄金塚古墳は鉄地金貼による単龍環頭、塚田2号墳が金銀装大刀の単鳳環頭であり、いずれも6世紀中葉～後半という時期が該当する。足柄平野の南部には久野古墳群が久野丘陵上に広く展開し、群内及び周囲には総世寺裏古墳や久野2号墳、天神山1号墳などが存在する。前二者の副葬品をみると、鉄製で端部が波状の形状となる鞘尻を備える装飾大刀や、象嵌大刀及び金銅装大刀などの出土がある。

金銅装圭頭大刀については「木質と柄頭金具の一部が遺存する。本体は一木から削り出したもので、柄頭金具の文様に合わせて圭頭のスタイルを極めて丁寧に彫刻している。柄頭金具は左側縁の一部であるが、中央部は窓が開いているようで、頭部は頭椎状に放射状の様子が打ち出されている」とされる [野崎他1996]。圭頭と頭椎の折衷型とも言うべき形態である。埼玉県小見真観寺古墳出土の横畦目式の頭椎大刀把頭を細身にしたような印象である (図9)。

これらは、6世紀後半～7世紀中葉にかかる時期と考えられ、北部よりも新しい様相を呈する

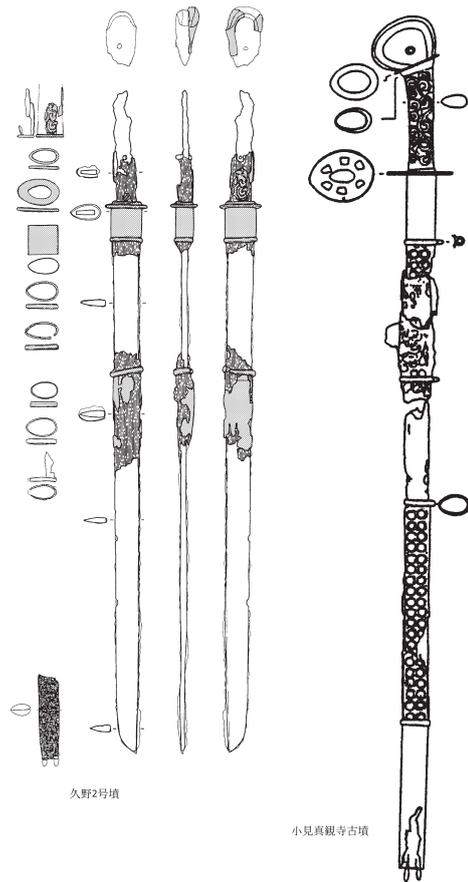


図9 久野2号墳の横畦目式に類する袋頭の形状

ものが多い。このような高塚墳とは別に、足柄平野東側となる大磯丘陵の西斜面及び平野北側奥には横穴墓が造られる。北部の唐沢・河南沢横穴墓群では装飾大刀が出土しており、環頭大刀を副葬していた平野北西部の黄金塚や塚田2号墳などの次段階となる優品として知られ、高塚墳の優品出土の継続性をふまえながらも、高塚古墳から横穴墓へ優品を出土する墳墓が変化していく様相も併せて確認されている (図10)。

主要墓域が限られた地域内で推移していく三ノ宮古墳群などの場合と、流域内で主要墓域が時期ごとに立地を違っていくという酒匂川流域の状況など、後期古墳の立地や分布を考えた時には、様々なパターンがある。前者は広域に影響を持つ首長墓を中心に古墳群が形成され、前方後円墳がその中心的な存在となるものが多い。云わば、地域内で核となる古墳群である。後者

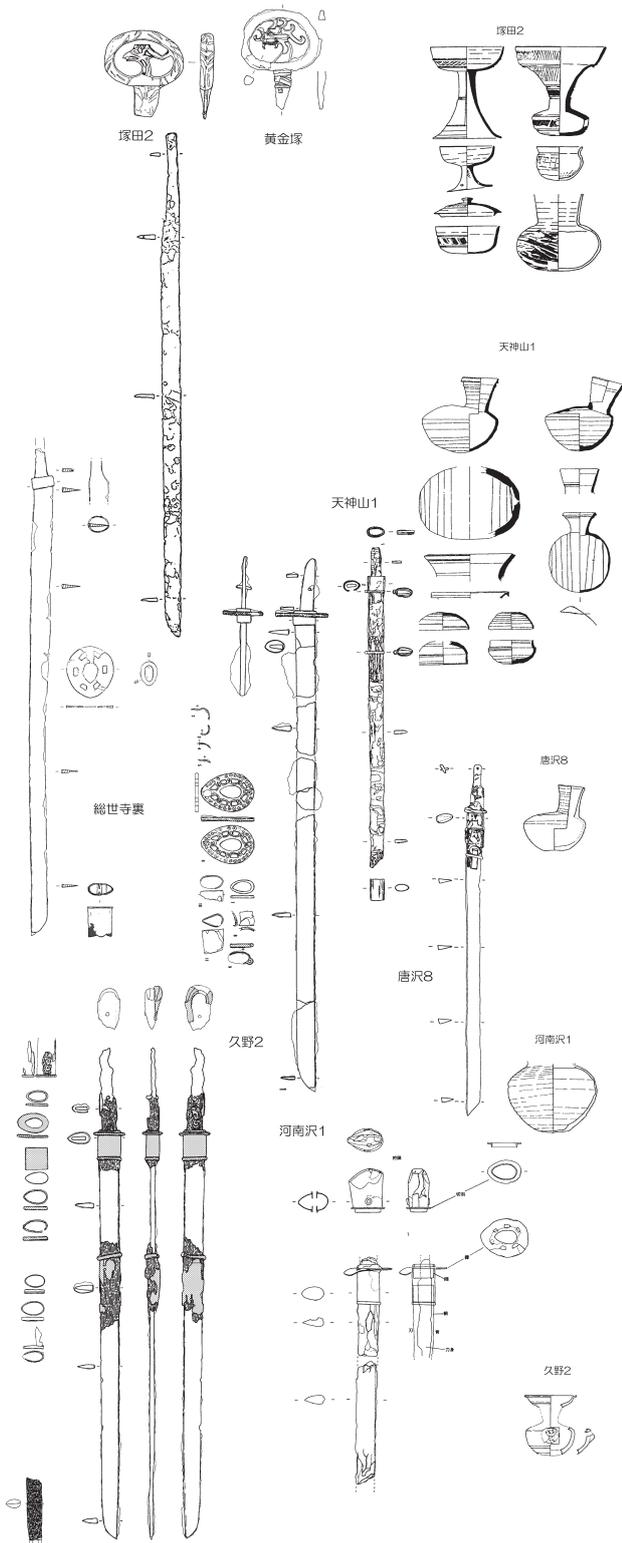


図10 足柄平野の高塚古墳と横穴墓出土遺物の変遷

はその核の周囲で、中心となる時期を少しずつ違えながら展開し、円墳による群が形成されるというもので、横穴墓のみからなる群在もこち

らに該当する。

相模では際立った存在の前方後円墳であるが、築造はいずれも6世紀後半～7世紀初頭で、この時期の古墳のみを抽出すると、ある程度普遍的であったということがいえる（図2）。

相模における前方後円墳は、古墳前期以降の築造中断期間を経て、後期末に突如として多数築造される。一部ではその前方後円墳を嚆矢として、継続して築造される円墳が数量的に圧倒するという古墳群へと展開していく。

多くの古墳群で前方後円墳は単発の築造で終わるが、築造開始が早かった三浦半島などの一部の地域では、およそ7世紀に入る頃まで前方後円墳により群形成がされる。ただ、この二相とも7世紀に入った頃に前方後円墳は一律に築造されなくなる。

このような県内の諸現象を垣間見ても、6世紀後半～7世紀初頭に築造された古墳は前方後円墳による墳丘形状の顕示という表象の機能を有していたことが窺える。

前方後円墳が後期に再度小規模な墳丘ながら広域に展開した要因として、地域内での内在的な理由を求めることは難しい。地域内に展開する古墳群は群内で前方後円墳築造の継続性がほとんどみられず、たとえ同じ前方後円墳でも、内部主体はより小地域での統一性がみえるという状況である。また一代限りの築造で終わってしまうという在り方が多いということや、それまで古墳が造られてこなかった場所に新たに築造されるという様相もある。人口増や可耕地の拡大、手工業生産の発展などの状況も、現在の資料からは見えてこず、経済活動に裏打ちされた現象とも評価できない。これらからは地域発議で主導的に前方後円墳を築造したとは考えにくい。

相模地域だけを検討する限りでは、一時的ともいえる前方後円墳の築造にかかる要因をみることができず、他方に目を広げる必要がある。後に細かくふれるが、この6世紀後半～7世紀初

頭には、朝鮮半島情勢によるアジア的政変の煽りを受けた倭国の様相が知られる。一つには『日本書紀』[坂本他校注1965・1967]に国造・伴造などの軍から数万の兵士が動員されたという記載もみられ、それに起因する兵士や物資の流通網が併行して整備されていったというような歴史的な背景がある。このような背景の結果から生じるという視点で、外在的ともいえる要因を以下に検討していきたい。

3.2 副葬品の優劣

古墳及び横穴墓から出土する遺物は、6世紀末～7世紀初頭に金銅製品等の出土が目立つ。副葬品には銅鏡・装飾大刀・弓弭・馬具（轡・鞍・杏葉・雲珠・鏡など）・銅匙の他、畿内産土師器坏などがあるが、これらについては古墳・横穴墓共に金銅製品が出土するなど、副葬品から見た優劣差が即座に言及できないものである。

しかしながら副葬される鏡などの様相について細かく見ていくと、導入段階は高塚古墳で、その後に若干の時間差を経て横穴墓でも出土するという状況も見えてくる。これは、地域内で高塚古墳と横穴墓が群在して一つの群を構成しているもので比較しやすく、副葬品対比からは、高塚古墳の優位性から横穴墓との同列化、その後となる横穴墓の優位性という現象として表れる。高塚古墳と横穴墓が群在しない場合は、金銅製品などが副葬された時期における、それぞれの墓制を選択した被葬者の立場の優劣差であったという現象とみることができる。

三ノ宮古墳群の様相をみてみよう。横穴式石室導入段階の三ノ宮・下谷戸遺跡H7号墓では、須恵器壺と土師器、鉄鎌などが出土し、周溝には馬が埋葬されていた。三ノ宮3号墳では銚及び馬具を持つが、大刀刀身と共に銅製の責金具が出土している。登尾山古墳では、より一層出土遺物は豊富で、銅鏡・銅鏡・金銅装圭頭大刀・雲珠・鏡板（心葉形）・杏葉（心葉形）・鞍金具・鉄鎌・須恵器長脚二段透かし高坏・土師器坏などが挙げら

れる。ただし、副葬品等の遺物には複数のセット関係と時期差なども考えられることから、追葬が行われていることが窺える。続く埴免古墳では、銅鏡・銀装円頭大刀（圭頭の可能性もあり）・鞍・鏡板（棘葉形）・杏葉（棘葉形）・玉類（琥珀製棗玉）などがあり、これらは首長墓の威信財としての位置付けが可能であろう。

横穴墓でも優品が出土する。三ノ宮・下尾崎遺跡、三ノ宮・上栗原遺跡では出土例の少ない輪鏡、壺鏡が出土しており、いわゆる7世紀中葉以降の首長墓に副葬されるものと似た様相を呈する（図11）。壺鏡の出土した古墳について、例えば長野県岡谷市のコウモリ塚古墳では（図12）、馬具を中心に優れた副葬品が見られる。直径15mの円墳であるが、湖北古墳群中では大型墳に属し、石室規模も地域内では大きいとされる[宮坂1983]。他、静岡県富士市の東平1号墳でも壺鏡などの馬具が出土し（図13）、複数の大刀や丁字形利器といった優れた副葬品が出土している。墳丘は削平されていたが、周溝からは直径12mの円墳とされ、溶岩礫からなる横穴式石室の規模は長さ4.6mと通有ながら、愛鷹山麓の古墳では武器・馬具類等の優品が比較的多く発見されている[平林1990]。

副葬品に関してひとつ特徴的な例示をすると、鉄地金貼斧状鉄器と報告される鏝が横須賀市のかろうと山古墳で出土している。朝鮮半島で鉄鏝（日本では鑿状鉄製品・斧状鉄製品などと呼称）と呼ばれる製品は、3世紀代の奈良県ホケノ山古墳の出土資料を墳墓においては皮切りとし、5世紀前半の東京都野毛大塚古墳で知られ、兵庫・岡山・滋賀・栃木県などで類例が求められる。相模のかろうと山古墳では7世紀中葉に鉄地金貼製品として存在する（図14）。当初は鉄製利器として副葬されていたが、鉄地金貼という云わば象徴的な製品となり、威儀具としての機能が付加されたということも考えられる¹¹⁾。

この鏝に象徴されるように、首長墓にいわゆる威信財が副葬される状況は7世紀中頃までは継

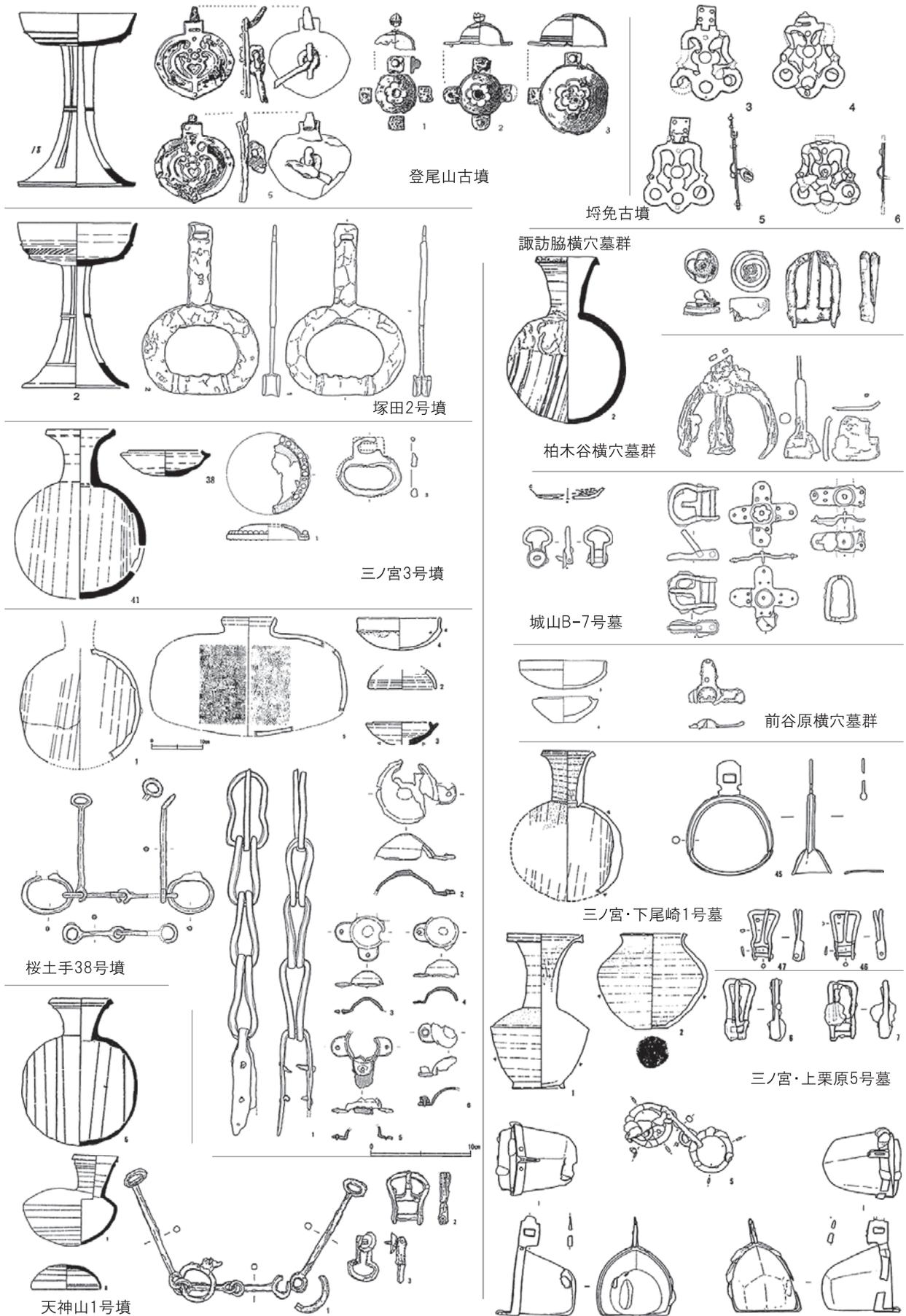


図 11 相模西部の高塚古墳及び横穴墓出土馬具の変遷

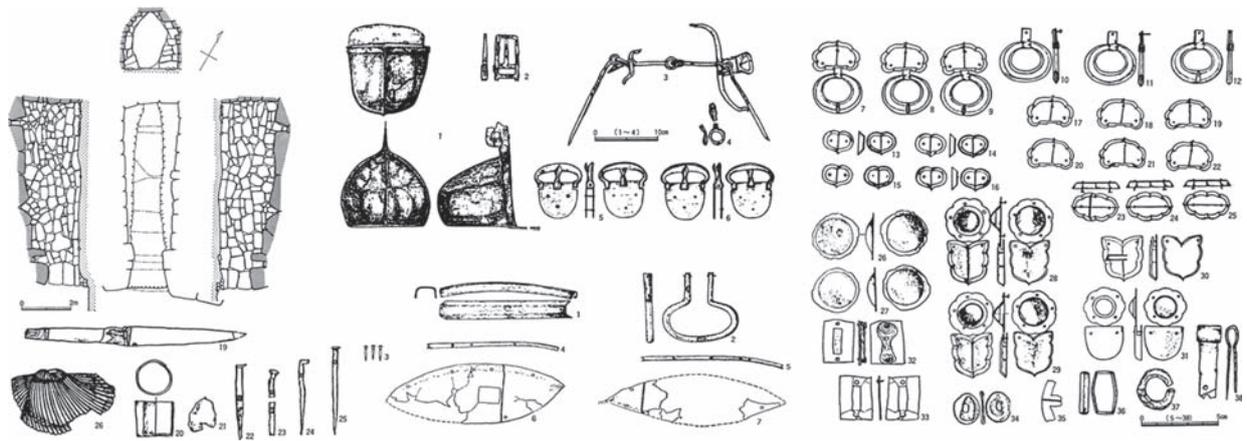


図 12 コウモリ塚古墳の横穴式石室と副葬品

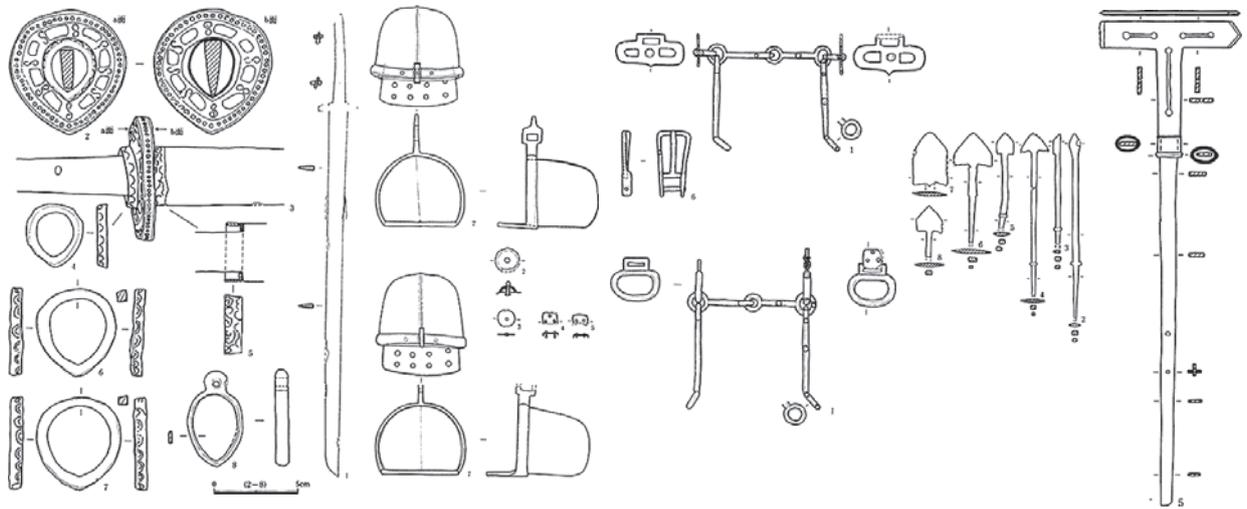
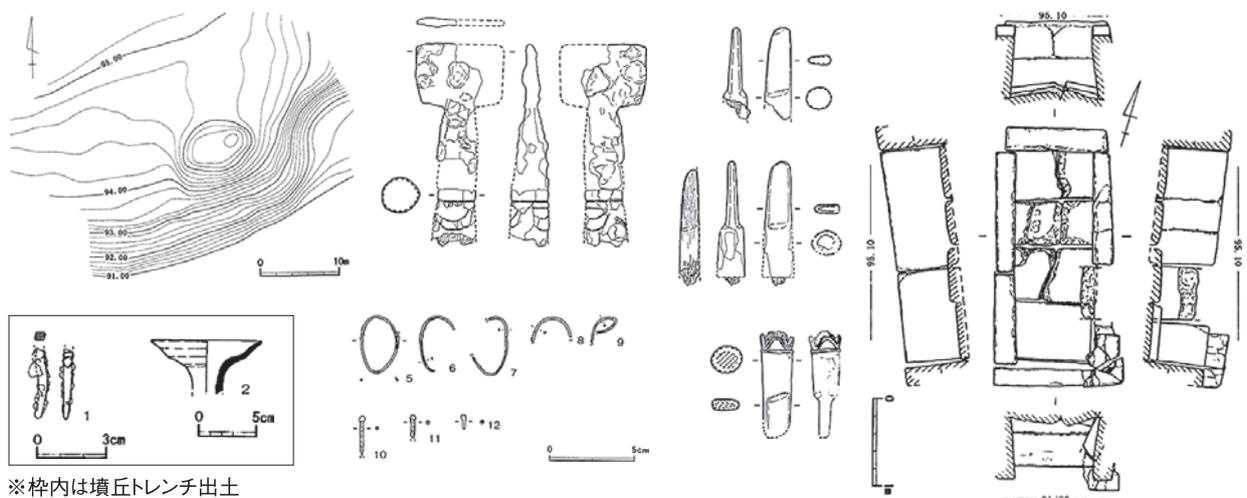


図 13 東平 1 号墳の副葬品



※枠内は墳丘トレンチ出土

図 14 かろうと山古墳

続されている。ここで細かくその様相を抽出すると、三ノ宮・下尾崎、三ノ宮・上栗原の鏡が首長墓的な側面を色濃く示していることが挙げられる。また、このことは相模地域内の横穴墓で、7世紀中葉以降は少量の土器以外出土しなくなるという普遍的な現象とは異なり、特別な印象を受けるものである。

7世紀前半までは高塚墳のいわゆる威信財が卓越するものの、7世紀中葉およびそれ以降には、一部の横穴墓にもそれらが内包される。これが高塚墳と横穴墓が混在する地の状況として理解され、高塚墳と横穴墓がそれぞれ立地を違えて群集して築造される地では、少しく違った様相となる。

3.3 中継中核地域

東海以東で横穴墓の築造が行なわれた6世紀中葉以降(一部では前半との指摘もあり)から、前方後円墳終焉の6世紀末～7世紀初頭を中心としては首長級の横穴墓の築造がされ、太平洋沿岸を広域的に見ていくと、宇洞ヶ谷横穴墓(静岡県)・赤羽B支丘1号墓(茨城県)・中田1号墓(福島県)などが代表例として挙げられる。

冠、鏡(小)、装飾大刀、挂甲、馬具などの首長級の威信財を副葬する横穴墓は、太平洋沿岸部に築造され、その点在する分布の様相からは海道(海路)が重視されていたことを物語っている。これら横穴墓の築造は地域内で初現とはならず、やや遅れての築造となるものが多く、横穴墓が継続して(一部は群を違えつつも)築造されていく様相が知られる。

このような首長墓級の副葬品を持つ横穴墓が沿岸地域に点在するという状況は、同じ様相を呈する横穴墓の数が極端に少ないこと、沿岸部という立地に点在していること、周囲に首長墓級の副葬品をもつ墳墓がみられないこと、歴史的な背景として輸送に関する各種整備が必要とされたことが考えられることなどから、その地域が流通にかかる中継基地として新たに設置さ

れた拠点であったという理解もできよう。

該当する時期の国際情勢を考慮すると、『日本書紀』に記載された兵や物資の輸送記事及び戦闘記事、筑紫への駐留記事などが多くみられ、兵站等戦闘物資及び生活物資輸送に力点が置かれていたことが知られる。冠や鏡などの優れた威信財が副葬された横穴墓の被葬者は、このような輸送にかかる拠点地域に新たに設置された、太平洋沿岸における中核的なリーダーという側面の想定もできる。太平洋沿岸に点在する中継拠点を中継中核地域という位置付けとしたい。

この人的及び物資の移動による経過の中で、横穴墓の築造技術及び人の移動が為されたことも考えられる。この現象は7世紀前半になると沿岸部に限らない分布となり、いわゆる山道においても中継中核地域という位置付けがなされたことが考えられる¹²⁾。相模での横穴墓をこの考えにあてはめると、鏡を出土した万田熊ノ台や鳥ヶ崎などの横穴墓の被葬者がその役割の一部を担っていたことも想定される。

4. 前方後円墳築造の外在的要因

4.1 三ノ宮古墳群の政治性

前方後円墳は往時の社会情勢などを如実に示す表象としての墳墓という理解をすることができ、西島定生氏(1961)によれば、前方後円墳という特殊な墳墓形式が墳形をかえることなく地方に波及するという現象は、地方豪族と大和朝廷との政治的関係を媒介として表現される、豪族権力の身分的表現であると考えられている。これによれば、古墳文化の地方への波及は、大和朝廷を中心として、各地の大豪族がひとつの国家へと編成されていく過程を示すものともみることができる。

相模では、6世紀後半から複数の前方後円墳が再度築造されるが、いずれも小規模であることはこれまで述べたとおりである。横穴式石室の築造で嚆矢となるのは三ノ宮・下谷戸遺跡H7号墳であり、自然石による奥壁は上部が削平され

ているが、残存一石で無袖の狭長な玄室平面形となる。墳形は円墳で周溝を備え、本来的には全周していたと考えられる。石室上部は削平されているが、羨門部にはやや小振りな自然石により閉塞がされている。

この例からは三ノ宮古墳群内でも、古墳が築かれた最初の段階は円墳であったことが考えられる。副葬品としては甕が出土しており、この6世紀前葉～中葉の横穴式石室導入段階では円墳による群形成が読み取れる。少し後の6世紀後半の築造となる登尾山古墳は前方後円墳であることが推測され、近隣の二子塚古墳やその周辺の事例をみると、7世紀初頭までの段階に相模で前方後円墳が複数築造される。

相模川中流域西部から金目川流域付近は、前方後円墳の築造が横穴式石室導入以後の事象として捉えられるが、三浦半島では石室ではない竪穴系の埋葬施設の段階で前方後円墳は築造され始め、およそ6世紀後半段階に横穴式石室が採用されている。南武蔵となる横浜市域では、横穴式石室の導入が前方後円墳からという位置付けとなる。

この横穴式石室の採用は、地域における竪穴系から横穴系へという大きな埋葬観念の変化として捉えられる。しかし、主体部は築造後には墳丘内に隠されてしまい、一部の人たちしかその形状は知られないこととなり、表示機能を有したものではない。表示機能はやはり墳形であるといえるが、二子塚古墳を有する薬師原古墳群でも、一世代が一基の前方後円墳を築造するというもので、三ノ宮古墳群内では登尾山古墳の次世代と考えられる埴免古墳は円墳となる。埴免古墳の横穴式石室は、地域内に比して巨石を用いた片袖式の横穴式石室であり、墳丘規模も40mと相模ではこの時期最大級の古墳である。

同じような時期に、巨大な前方後円墳と大振りな円墳が相次いで築造される例は、香川・兵庫・山梨県などで古墳時代前期後半にもみられる現象であるが、これは地域内における内在的な要

因による事象とは考えられず、時期を違えても同じような、地域にとっては外在的ともいえる要因からなる事象が原因として捉えられる。

このことは、前方後円墳の築造を大和政権による地方運営の表象と評価すれば、前方後円墳を築造している時は、中央と地方の緊密さという視点でより関係が深かったということが考えられる。次の段階で前方後円墳を造らずに円墳へと変容することは、関係の緊密さが一時的に薄れたとも捉えられ、この現象は、地域と時期により関係の内容は異なる。

広瀬和雄氏は前方後円墳のあり方として、複数系譜型古墳群・単一系譜型古墳群・輪番型古墳群と三つの類型を挙げている[広瀬2003]。「複数系譜型古墳群」は複数の首長たちが一定期間、同一の墓域で古墳造営をつづけたものとし、佐紀・馬見・古市・百舌鳥などの大型古墳群は、大和政権の中枢を担った有力首長層の共同墓域とされている。そこには地方首長の政治的実力と、大和政権中枢の地方支配の二重性が表出されているとする。

ここで三ノ宮古墳群をみていくと、登尾山古墳のほか、地域内では最大級の円墳である埴免古墳、三輪玉や双龍環頭大刀を出土した御領原支群など、直径2.5kmの範囲に優れた副葬品を持つ古墳が築造され続けるという状況があげられる。このように、いわゆる優品の副葬品が限られた地域内に継続しながら集中して出土するという様相は他ではみられず、前方後円墳だけによる首長墓の構成という点は異なるものの、地域を代表する三ノ宮古墳群のこのありかたは、「複数系譜型古墳群」として捉えられるであろう。

また、広瀬氏は首長層についてもふれ、中小首長層もしくはその一族の有力者などが前方後円墳国家に参画していた。地方統治のための職務を担当していた〈原初的な官僚層〉として稲荷山古墳(丈刀人)・江田船山古墳(典曹人)などにみられるような職掌が、上番していた地方首長に充当されていたとしている。地域でのあ

り方は、重層していた地方首長層という上位・中位・下位の三つの位相を示すとしている。下位の位相は、農耕共同体の首長、律令制下の1～2郷程度の範囲が首長の領域¹³⁾とされている。

このような構成イメージのなか、下位の位相とされた小首長までが前方後円墳を築造できたことから、一世代が一基の前方後円墳を築造するという短期間での現象ながら、相模では結果として多くの築造がみられることとなっている。このような地方の小首長まで前方後円墳を造りえたのは、どのような背景のもとであろうか。一つには広瀬氏の言うところの原初的な官僚層という地方人材の登用を行なうことにより、地方整備が地方主導で行なえるべき連携と体力が備わった結果ともいえよう。

4.2 相模に展開する古墳群と東アジア情勢

外的要因としては、東アジア情勢も関係していることが考えられる。前方後円墳が築造中断期間を持ちながら、再度築造され終焉するという6世紀後半～7世紀初頭には、百済・新羅・高句麗の戦闘も激化しており、562年には新羅の大加耶攻撃を経て伽耶諸国が統合されている。倭と朝鮮半島とのこうした関わりは『日本書紀』にも記されており、その一部をみていくと、兵士・軍馬・軍船の援助から、直接の戦闘行為までがみられる。『日本書紀』坂本他校注1965・1967を参考にその一部を引用する。

- 547 (日本書紀 卷第19: 欽明8年)
百済、救援の軍を要請
- 548 (日本書紀 卷第19: 欽明9年)
倭 百済に370人をおくり築城を助ける
- 550 (日本書紀 卷第19: 欽明11年)
百済、高句麗の奴と捕虜を倭に贈る
- 554 (日本書紀 卷第19: 欽明15年)
百済に兵1000人、馬100匹、船40隻をおくる
倭・百済両軍、新羅と戦い、百済の聖明王戦死
- 556 (日本書紀 卷第19: 欽明17年)
百済の恵、帰国。筑紫の水軍、筑紫火君の兵、

- 恵を護送
- 562 (日本書紀 卷第19: 欽明23年)
新羅、加耶諸国を領土化。紀男麻呂、新羅と戦う
大伴狭手彦、高句麗と戦う
- 570 (日本書紀 卷第19: 欽明31年)
高句麗の使人、越国に漂着する
- 571 (日本書紀 卷第19: 欽明32年)
欽明天皇(63)没、新羅征討任那再興を遺紹
- 591 (日本書紀 卷第21: 崇峻4年)
任那復興のため紀男麻呂らを大將軍とし2万余の軍を筑紫に送る
新羅と百済に使を派遣する
- 600 (日本書紀 卷第22: 推古8年)
境部臣ら、万余の軍を率いて新羅を討つ
新羅と任那とが戦う。この年新羅の5城を攻める。新羅降伏する
難波吉師神を新羅に、難波吉土木蓮子を任那に遣わす
両国、調を貢進する。新羅、また任那を侵す
- 601 (日本書紀 卷第22: 推古9年)
大伴連嚙を高句麗に遣わし、坂本臣糠手を百済に遣わす
詔して曰はく、「急に任那を救え」
- 602 (日本書紀 卷第22: 推古10年)
来目皇子撃新羅將軍に任命(来目皇子病に臥して征討を果たせず)
国造・伴造らの軍2万5千人を動員する
大伴連嚙・坂本臣糠手、共に百済より至る
- 603 (日本書紀 卷第22: 推古11年)
来目皇子筑紫に没。当麻皇子を征新羅將軍に任ずる
当麻皇子随伴した妻の死により赤石から帰る。新羅攻撃中止

ここに『日本書紀』に兵士や軍馬・軍船などの記載がみられる部分を抽出したが、548年の百済への築城に関する人的援助、554年の百済への軍馬・軍船を伴う援軍、また、591年からは新羅征討に本格的に取り組むかの記載もみられ、筑紫への駐屯と境部臣らの朝鮮半島での戦闘の様子も記される。602年には、国造・伴造らの軍を動員するなど、591年の2万余の軍、600年の万余の軍、602年の2万5千人など、一部は重複するものの、数多くの派兵を行なったことが窺える。

この後も676年の朝鮮半島の新羅統一までは、唐による高句麗遠征に伴う救援要請など、東アジア情勢との関わりが倭の対外政策の骨子となっていたようである。

しかし、倭と朝鮮半島情勢において古代最大の戦闘といわれる663年の白村江の戦いで、上毛野雅子ら、兵2万7千人を率いて新羅に派兵されたが、日本・百濟軍は、唐・新羅軍に大敗という結果になっている。

これにより、実質、半島情勢から手を引き、防人・烽を対馬・壱岐・筑紫に置き、水城を築き、瀬戸内海に点在する山城の築造に追われるなど、戦後処理と国内の対応に迫られることとなる。内政では、672年の壬申の乱、7世紀中頃から見られ出す蝦夷対策、阿倍比羅夫による征討記事など、海外から国内まで、大和政権は厳しい対応に追われた激動の時期といえる。

広瀬氏は壱岐島にて、6世紀後半ごろから7世紀前半ごろの集中的な造墓活動及び、北・中部九州をリードした可能性を秘めた巨石墳の築造から、その要因を壱岐島の在地的な動向だけで解釈するのは難しいとし、外的要因の一つは、激化した朝鮮半島情勢との国境防衛がその目的のひとつであったとする [広瀬2010a]。

また、前記した数万の兵の筑紫への駐留ということに関しては、仁藤敦史氏によると筑紫・肥・豊、三国屯倉を中心に、諸国から「那津官家」へ兵糧米が集積される体制が整備されたことを想定しなければならないとしている [仁藤2009]。

国内の物資等の移動にかかる流通についてはいわゆるインフラ等の整備も必要であり、その役割を担ったのが、先に提示した中継中核地域としての地方であり、その一端が副葬品の優品出土という現象に顕わされているのであろう。

6世紀後半～7世紀初頭にかかる兵士等の人的な動員は、7世紀後半の白村江敗戦以降に設置された防人の様相を受けても、東国からの動員が求められていたことが推測される。万余の動員

には、政権としての確固たる地盤と、前方後円墳を一つの骨格とした長い歴史を踏まえた国家運営の蓄積も必要であっただろう。いずれにしても白村江の戦いなどは、前方後円墳国家として築き上げられてきた倭国が、これら戦闘や国外・国内対応により、律令国家へと転換していく契機となったことには変わりがない。

広瀬氏は、6世紀後半に前方後円墳が東国で急増するという情勢について、次のような評価をしている。金鈴塚古墳・城山1号墳（千葉県）、観音塚古墳・綿貫観音山古墳（群馬県）、風返稲荷山古墳（茨城県）などの首長層による前方後円墳を例示し、墳丘規模や形象埴輪による表飾、多量の副葬品を持つという様相を受けて、これらの築造背景には「東国首長層再編のための政策」があったとする。経済的にも政治的にも力量を高めていた首長たちを直接統治するという、本格的な東国支配を目論むもので、直接的な契機は新羅に対する外交政策にあったとされる [広瀬2010b]。

相模では、4世紀末に途絶した前方後円墳は6世紀後半に再度築造が始まるが、多くは一世代が一基の前方後円墳を築造するというものであり、7世紀初頭以降は築造が終焉する。この限られた時期に多くの人材が筑紫に集結し、一部は朝鮮半島での戦闘に駆り出されていることは、これら行為への動員（戦闘行為への参加）及び、物資等流通の担い手という労働力提供の代償として、前方後円墳の築造が斡旋されたということも考えられよう。

中央としては、大和政権の一員であることの確認行為として、地方としては、前方後円墳という墳形表示による中央政権が背後にいるという権威表示による地方運営という、両者にとっての国家運営・地方運営という思惑が一致した結果であると考えられる。

他面では朝鮮半島情勢などのアジア的政変の煽りを受けた、内政不安からの精神面の補填ともいえるべき、先には大王墓に採用された墳丘

形状の地方への築造斡旋というような施策の一面も考えられる。東国経営のなかでの墳丘の優位性の表示という、権威明示の地方における享受という現象が、相模地域の前方後円墳をみたなかでも伺えるものである。

前方後円墳という墳形表示以外にも、大和政権は副葬品となる器財を活用して、亡き首長の次代を担う人材の権威表示を補助していたことも考えられる。前方後円墳という墳形はいわば一律であるなかで、享受した地方では、内部主体となる埋葬施設は、その地方の特性を活かしており、葬送観念の主要な要素となる埋葬行為という部分に関しては、地方優先・地方単位で実際は行なわれていたといえる。

主体部へ埋葬するという儀礼においては副葬品が活用され、その場面での重要な表示機能を有していた。大刀や馬具などの威信財となる優品の一部は、地方で製作することが叶わず、大和政権からの下賜品と想定されるため、次代を担う人材の権威明示に使用する道具としての機能が付されていたようだ。埋葬するにあたり墓前等に並べ置かれ、参列者などの周囲に対して亡き首長の権威を改めて確認するとともに、次期首長の権威継承の表示、大和政権との繋がりがシステムとして顕わされていたのであろう。

このことは、相模に限らず6世紀後半～7世紀初頭にかけて、それまで中断していた前方後円墳の築造が再開され、前方後円墳体制が終焉していくという地方では、同じ事象として捉えることもできるだろう。

5. まとめ

三ノ宮古墳群内の首長墓といえる登尾山古墳については、相模に展開する周囲の古墳を加味しても、20mクラスの円墳であるとは考えづらい。副葬品の豪華さは、他に比して同時期の古墳の中では卓越しており、6世紀後半という築造時期を考慮すると、前方後円墳という墳形がふ

さわしいものと推測する。さらに想像逞しくすれば、古墳が立地する丘陵地形の地形的制約を考慮すると、巨大古墳とはなりえず、およそ50m以下の墳丘サイズが考えられるものである。

登尾山古墳の横穴式石室が前壁を備える両袖式であることは、県内でも希少事例と捉えられるが、奥壁に小振りな石を積み上げるその石室の形状は6世紀後半における畿内の横穴式石室の構築方法に相似し、東国の首長乱立という現象の中でも、相模という遠隔地にかかる畿内との共通項がみえてくるものである。

三ノ宮の地はなぜ首長墓を含めた古墳群や横穴墓群が数量的に卓越した地域として存在しているのか。このことを考える上で重要なのは、古墳が築造されている地形的な側面を考える必要もあろう。三ノ宮の地は、鈴川や栗原川に開析された台地及び丘陵地形であり、南には一直線に広大な低地が広がり、北および西には丘陵地形が展開するが、西方には幹道たりうる善波峠越えの道の存在が考えられ、東には鈴川などの河川が展開する。このような「四神相応」に類するという地形が十分に意識された立地であるとも解釈できる。出土遺物の豊富さと、集中する古墳数量の多寡などを考えても、「相武国造」の墓域とも考えられる三ノ宮古墳群は、選ばれるべくして選ばれた特別な地としての理解が可能である。

古墳時代後期・終末期に限らないが、地域内のみの視点で歴史解釈を導き出すことは難しい。列島各地域との比較は必要不可欠である。それを解釈するにあたっては日本を取り巻く東アジア的視座も事象に応じては必要なこととなる。ただ、それら総合的解釈を導くためにも、立ち戻っての地域内検討は重要であり、その礎をへて、初めて体系的理解が成されるものである。6世紀後半～7世紀代の古墳築造の背景を探るための指標は、壱岐の検討などをベースに広瀬氏により示されてきたところであるが、今回の相模の検討を受けても関東の一世代が一基を築造

するという前方後円墳復権の背景には、激動する東アジア情勢を考慮しないとその背景は探りえないものであった。併せて国内流通網の整備として、中継中核地域の発展という役割を地方が担っていたことも副葬品等の様相から推察される。これら地方の在り方から国勢を紐解く一つの提示として、今回の論は攔筆としたい。

註

- 1) 大上周三1994「集落・墳墓分布における秦野の古代社会」『神奈川考古』第30号にて定義された。
- 2) 神奈川県では律令期の地域区分として、現在の川崎・横浜市域を中心としては南武蔵に属す。郡域は3郡で、橘樹郡・都筑郡・久良郡となる(図1㉔地域)。県内のそれ以外の地は相模となり、郡域は8郡で、御浦郡・鎌倉郡(図1㉑地域)、高座郡(図1㉓地域)、愛甲郡・大住郡(図1㉒地域)、余綾郡・足上郡・足下郡(図1㉕地域)となる。また、本論では便宜的に現在の市区町村で地域分けを行っているが、金目川西岸の地域となる大磯丘陵に関しては、ここでは丘陵全域を余綾郡に含めて扱っている。相模における律令期以前のいわゆる国造域は、㉕が師長国造域、㉒・㉓が相武国造域、㉑が鎌倉別の領域として扱っている。
- 3) 秦野市の二子塚古墳(前方後円墳)で、史跡整備にかかる2010年の調査で銀装圭頭大刀が出土。
- 4) 三ノ宮・下原田遺跡の調査概要は、2009年度開催の第1回伊勢原市遺跡発表会にて報告。
- 5) 大振りな切羽が出土していることから、袋頭(頭椎)の装飾大刀である可能性が考えられる。大刀刀身は大振りで、関は刃側二段両関であり、大振りな切羽の出土している古墳の刀身の関形状をみると、二段両関が一定数あり、それらは時期を限定しては頭椎大刀の刀身である可能性が高いことが考えられる。
- 6) 周溝内出土の馬は鑑定の結果から、歯による年齢推定は2.5才、体高は $125.69 \pm 2.72\text{cm}$ とされ、成長期の馬であることが示されている。
- 7) 恵泉女学園短期大学園芸生活科のキャンパスを伊勢原市に移転。恵泉女学園園芸短期大学と2002年に改称。2003年度をもって学生募集を終了。翌年より恵泉女学園大学へ一体化される。
- 8) 神奈川県史によると群中の大塚と呼ばれる古墳は、「地主大矢留吉が石材をとる目的で発掘(破

壊)、出土品は屋敷鎮守社下に埋めた。大正末年に子の徳太郎が掘り出し自宅に保管したが戦後骨董商に渡ったのを比々多神社主永井参治が銅釧・三輪玉・玉類など229点を買戻し保管」とされている。

- 9) 一部には大塚古墳群との表記もあり、大塚が個別の古墳を指し示すかは定かではないとされる。
- 10) 下大槻欠上遺跡で調査された古墳は円墳が1基で、1999(平成11)年に実施されている。石室の構築に使用している礫は河原石で、奥壁にはいわゆる鏡石が使われていない。外護列石の存在も示唆され、出土遺物には耳環・切子玉・管玉・ガラス小玉などが出土している。
- 11) 7世紀代のいわゆる鐘の出土は、岡山県定東塚古墳(7世紀前半)、兵庫県竹ノ内古墳群第3号墳(7世紀前半)・東山古墳群10号墳(7世紀中葉)、大阪府檜尾塚原古墳群8号墳(6世紀後半～末)、栃木県桃花原古墳(7世紀前半)、神奈川県かろうと山古墳(7世紀中葉)がある。通有の鉄斧との形状差については、ソケットが刃部より長い、刃部の幅が広い(刃部長:刃部幅が1:1.5以上の比率)、木製の柄は長いものが装着されることが想定される。岡山・兵庫・大阪・栃木と分布は広範に見られるが、相模のかろうと山古墳が三浦半島という横穴墓が卓越する密集地域である以外は、いずれも横穴墓の分布が希薄、もしくは地域内で存在しない場所として理解できるところが興味深い。かろうと山古墳は、いわゆる山寄せ式の古墳であり、独立点在するかの印象であり、小谷戸毎に小規模ながら横穴墓が群在する地域の中に突如として築造されたという印象を受けるものである。
- 12) 7世紀前半は沿岸部に限らない分布となり、福島県[白河] 筑内古墳群(横穴墓群)、静岡県[遠江] 観音寺本堂I群1号横穴墓、三浦半島[相模] 江奈2号横穴墓や、福島県[石城] 小申田北18号横穴墓で豊富な威信財が出土している。いわゆる山道も中継中核地域として位置づけられ、白河の筑内は、その後、前庭部を共有するという北部九州に盛行するタイプが多く築造され、これは東日本では白河のみに所在する。会津や石背の前庭部石積もこのような動向に関係が見いだせる可能性もある。
- 13) 播磨の例として、後期前半の小型前方後円墳はこのクラスの首長が自己の領域に築造され、その現象を小規模首長墓の乱立として捉える岸本道昭氏の見解を例示している。

参考文献

明石 新他

2001 『相武国の古墳—相模川流域の古墳時代—』平塚市博物館。

穴沢味光・馬目順一・中山清隆

1979 「相模出土の環頭大刀の諸問題」『神奈川考古』6。

青木健二・四本和行

1984 『神奈川県横浜市三保杉沢遺跡群』日本窯業史研究所。

藤沢市教育委員会

1997 『神奈川の古代道』。

浜田晋介

1996・1997 「加瀬台古墳群の研究Ⅰ・Ⅱ」『川崎市市民ミュージアム考古学叢書』2・3。

浜田晋介他

1995 『川崎市市民ミュージアム収蔵品目録考古資料1 岡道孝コレクション』。

秦野市教育委員会

2001 「6 秦野市下大槻欠上遺跡」『秦野の文化財』37。

平林将信

1990 「157 東平第1号墳」『静岡県史』資料編2、考古二。

平野卓治他

『企画展 横浜の古墳と副葬品』横浜市歴史博物館。

広瀬和雄

1994 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 東北・関東編』。

2003 『前方後円墳国家』角川選書355。

2010a 「壱岐島の後・終末期古墳の歴史的意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』158、pp. 107-141。

2010b 『前方後円墳の世界』岩波新書。

広瀬和雄・池上 悟編

2007 「武蔵と相模の古墳」『季刊考古学』別冊15。

井出智之他

2001 「日向・渋田遺跡」「高森・赤坂遺跡」『いせはらの遺跡』Ⅰ。

池上 悟

1980 「積み石塚の地域相—関東・東北地方」『考古学ジャーナル』180、pp. 37-41。

稲村 繁

1997 「三浦半島の古墳Ⅲ—出現期横穴墓の様相」『横須賀市博物館研究報告』42。

2004 「神奈川県の古墳Ⅲ—神奈川県古墳地名

表(1)」『横須賀市博物館研究報告』48。

2004 「横須賀市かろうと山古墳」『第28回神奈川県遺跡調査・研究発表会』発表要旨。

2005 「神奈川県の古墳Ⅳ—神奈川県古墳地名表(2)」『横須賀市博物館研究報告』50。

2008 「横須賀市 大津古墳群」『第31回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』。

神奈川県民部県史編集室

1979 『神奈川県史』資料編20、考古資料。

1981 『神奈川県史』通史編1、原始・古代・中世。

柏木善治

2004a 「神奈川県内における古墳出土鉄製品の形態的検討」『研究紀要』9、(財)かながわ考古学財団。

2004b 「東国からみた終末期古墳の一樣相」『東風史筆』Report 2 (林 美佐氏共著)。

2005 「神奈川県における前方後円墳以後と古墳の終末」『第10回 東北・関東前方後円墳研究会大会 発表要旨』東北・関東前方後円墳研究会。

2009 「葬送に見る横穴墓の機能と構造変化—神奈川県における改葬の事例を中心として—」『古代』122、pp. 53-77。

柏木善治他

2000 「笠窪・谷戸遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』67。

2007 「湘南新道関連遺跡 Ⅲ」『かながわ考古学財団調査報告』210。

2009 「湘南新道関連遺跡 Ⅳ」『かながわ考古学財団調査報告』243。

川江秀孝

1978 「馬具」『静岡県史』資料編3、考古三。

木下 良・荒井秀規他

1997 『神奈川の古代道』藤沢市教育委員会。

桐原 健

1989 「積石塚と渡来人」『UP考古学選書』東京大学出版会。

岸本道昭

2000 『播磨学紀要』6。

古墳時代研究PC

1995～2003 「横穴墓の研究(1)～(9)」『神奈川の考古学』5～『研究紀要』8、(財)かながわ考古学財団。

1998・99 「久野・総世寺裏古墳の調査(1)(2)」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』40・41。

- 小出義治・久保哲三
1974 「秦野下大槻」『秦野の文化財』9・10、秦野市教育委員会。
- 近藤義郎編
1994 『前方後円墳集成 東北・関東編』。
- 宮坂光昭
1983 「コウモリ塚古墳」『長野県史』考古資料編全1巻、主要遺跡（中・南信）。
- 桃崎祐輔
2002 「筑内37号横穴墓出土馬具から復元される馬装について」『福島県文化財センター白河館 研究紀要2001』。
- 森本六爾・谷木光之助
1927 「武蔵南部における特色ある横穴」『中央史壇』13(5)・(11)。
- 中丸和伯
1974 『神奈川県歴史』県史シリーズ14、山川出版社。
- 西嶋定生
1961 「古墳と大和政権」『岡山史学』10。
- 西川修一
2007 「相模の首長墓系列」広瀬和雄・池上悟編『武蔵と相模の古墳』季刊考古学別冊15、雄山閣。
- 西川修一他
1999 「三ノ宮・下御領原遺跡 (No. 12西)」『かながわ考古学財団調査報告』52。
- 仁藤敦史
2009 「古代王権と「後期ミヤケ」」『国立歴史民俗博物館研究報告』152。
- 野崎欽五他
1996 「久野第2号古墳」『小田原市文化財調査報告書』58。
- 大上周三
1994 「集落・墳墓分布における秦野の古代社会」『神奈川考古』30、神奈川考古同人会。
- 大磯町郷土資料館
1994 「大磯町の横穴墓群」『資料館資料』5。
- 大野延太郎
1899 「武蔵北埼玉郡小見ノ古墳」『東京人類學會雑誌』14(156)、東京人類學會。
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注
1965 『日本書紀 下』日本古典文学大系68、岩波書店。
1967 『日本書紀 上』日本古典文学大系67、岩波書店。
- 関根孝夫
1999 「伊勢原の古墳 (講演資料)」『第23回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』。
- 六戸信悟
2001 「横穴式石室からみた古墳時代の秦野盆地」『研究紀要』2、桜土手古墳展示館。
- 六戸信悟他
2000 「三ノ宮・下谷戸遺跡Ⅱ」『かながわ考古学財団調査報告』76。
- 霜出俊弘
2010 「秦野市神奈川県指定史跡二子塚古墳一銀装大刀を副葬する前方後円墳」『第34回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』神奈川県考古学会。
- 立花 実
2008 「伊勢原市 日向・洗水遺跡」『第31回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』。
- 立花 実他
1995 「三ノ宮・下尾崎遺跡、三ノ宮・上栗原遺跡発掘調査報告書」『伊勢原市文化財調査報告書』17。
- 立花 実・手島真実
1999 「伊勢原市登尾山古墳再考」『東海史学』33。
- 高杉博章他
2000 『神奈川県平塚市 上吉沢市場地区遺跡群発掘調査報告書』。
- 滝沢 亮他
2007 『横浜市緑区北門古墳群』Ⅰ。
- 玉口時雄他
1997 『横須賀市吉井・池田地区遺跡群』Ⅱ。
- 田村良照他
1986 『川崎市内における横穴墓群の調査』。
- 田尾誠敏
1999 「遺物からみた「相模」の形成」『相模国の成立と地域社会』東海大学記念フォーラム発表要旨。
- 田尾誠敏他
1997 「神奈川県の状況」『遺物からみた律令国家と蝦夷』資料編第Ⅱ分冊。
- 寺村光晴・西川修一他
1998 「伊勢原市北高森古墳群と出土遺物」『かながわ考古学財団調査報告』33。
- 坪井正五郎
1900 「日本の「積ミ石塚」」『東京人類學雑誌』15(169)、東京人類學會。
- 上田 薫・長谷川厚・近野正幸
1991 「神奈川県の横穴墓群」『関東横穴墓遺

- 跡検討会資料』。
- 上田 薫他
 1991 「神奈川県横穴墓群」『茨城県考古学協会シンポジウム 関東横穴墓遺跡検討会資料』。
- 2002 「比奈窪中屋敷横穴墓群」『かながわ考古学財団調査報告』136。
- 植山英史
 2010 「相模」土生田純之編『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣。
- 植山英史他
 2007 「中依知遺跡群」『かながわ考古学財団調査報告』205。
- 渡辺 外他
 2004 「宮山中里遺跡・宮山台畑遺跡」『かながわ考古学財団調査報告』170。
- 横須賀市
 2010 「かろうと山古墳」『新横須賀市史』別編考古。
- 吉田章一郎他
 1989 『神奈川県秦野市桜土手古墳群の調査』桜土手古墳群発掘調査団。

Social Movements from the 6th to 7th Century in the Sagami Region, Eastern Japan: With special reference to the Sannomiya Kofun Group

KASHIWAGI, Zenji

The Graduate University for Advanced Studies, School of Cultural and Social Studies,
Department of Japanese History

I propose an examination of the role of a local community in medieval Japanese society, from investigating aspects of *Kofun* and *Yokoanabo* (cave tombs) spread out in the Sagami region from the late 6th to 7th century.

It is known that there are some *Kofun* which have many possessions buried together with a dead body, such as the *Tonoyama Kofun* or the *Rachimien Kofun* in the *Sannomiya* area, *Sagami* region. This area was considered as a graveyard of the *Sagami Kokuzo* (国造) with respect to the abundance of possessions buried together with a dead body, characteristics of the horizontal stone chamber, and the dimensions of the tomb mounds. I call this area in which many *Kofun* and *Yokoanabo* are concentrated the “*Sannomiya Kofun* group” and I establish that the area encompasses 2.5 km square around *Sannomiya-Hibita* shrine, which was *Shikinaisha* (式内社) provided by *Engishiki* (延喜式) book of laws and regulations. And I interpret the *Tonoyama kofun* as a keyhole-shaped tomb mound through the observation of the present topography.

Recent excavations have revealed that there are many keyhole-shaped tomb mounds in the Sagami region. I compared the *Sagami Kokuzo* area, including the *Sannomiya Kofun* group, with the *Shinaga Kokuzo* area, focusing on the locations of tomb mounds and the structure of tomb types in a group. As a result, I found two phases. One is the case in which the main area of tombs were limited around a kofun group, and in the other case the main area of tombs moved along a river with the passage of time.

I also found abundant superior possessions buried with a dead body which were excavated from a tomb mound of the chief, in cases where there are tomb mounds and *Yokoanabo* in a same *Kofun* group area. With the passage of time, abundant superior possessions came to be buried with a dead body in *Yokoanabo*. In the case of the areas which are predominant in *Yokoanabo*, abundant superior possessions were buried in *Yokoanabo* the same as in a tomb mound of a chief. I think these areas acted as relay stations for the transportation of arms and other necessities for state control.

Many keyhole-shaped tomb mounds were made and then went out of use from the late 6th to the early 7th century, through the time of an interruption in making keyhole-shaped tomb mounds. I think these facts reflect that a keyhole-shaped tomb mound was made for one person for generations, as influenced by external factors rather than internal factors of the area. From the background of the political change in Asia and the political situation of the Korean Peninsula, the structure of *Yamato Seiken* (political power) confirms that local chiefs held *Yamato Seiken*, and local chiefs gained political power and support for local governments through keyhole-shaped tombs. This influenced the consensus of expectations of the central political power and local chiefs.

Key words: Sagami, *Sannomiya Kofungun*, keyhole-shaped tomb mounds, the relay station, regional ruling classes, social phenomenon on the Korean Peninsula